

茨城城郭サミット

〔茨城県中世城館跡総合調査成果報告会〕

— 県北編 —

12:35～12:40

趣旨説明 高橋 修

12:40～13:30

記念講演 **それからの佐竹氏-常陸から出羽へ-** 1
金子 拓

13:40～15:55

報告① **県北地区の中世城館-近年の発掘事例を中心に-** 8
山口憲一

報告② **古文書・古記録が語る常陸北部の合戦と城館** 16
森木悠介

報告③ **常陸・下野国境の城館群-佐竹氏・那須氏の攻防-** 24
山川千博

報告④ **用水体系と平地城館-那珂市菅谷地区を事例として-** 32
藍原 怜

報告⑤ **まだまだあった！多賀郡の城館** 39
青木義一・五十嵐雄大

誌上報告 **史料紹介：東京大学史料編纂所に伝来する2枚の旧山方村城館絵図** 46
高橋拓也

誌上報告 **石神城跡の整備に向けて-近年の調査状況と成果概報-** 48
中泉雄太

誌上報告 **額田城跡における調査状況と成果概要** 50
菊池 晶

16:05～16:50

パネルディスカッション コーディネーター：高橋 修

高橋修(たかはしおさむ)

現職：茨城大学学長特別補佐／同人文社会科学部教授 常陸大宮市史編さん委員会委員長 東海村石神城跡調査整備委員会委員長など

元職：茨城県中世城館跡総合調査委員会委員長

出身地：埼玉県熊谷市 出身大学：神戸大学大学院文化学研究科

主な著書：『中世水軍領主論』（高志書院、2023年）、『戦う茂木一族』（編著、高志書院、2022年）、『戦国合戦図屏風の歴史学』（勉誠出版、2021年）、『熊谷直実 中世武士の生き方』（吉川弘文館、2014年）など。

金子拓(かねこひろく)

現職：東京大学史料編纂所教授

出身地：山形県山形市 出身大学：東北大学大学院文学研究科

主な業績：『長篠合戦 鉄砲戦の虚像と実像』（中央公論新社、2023年）、『織田信長権力論』（吉川弘文館、2015年）、『織田信長（天下人）の実像』（講談社、2014年）など。

山口憲一(やまぐちけんいち)

現職：常陸太田市教育委員会係長

出身地：茨城県常陸太田市 出身大学：立正大学文学部史学科

主な業績：「城びと お城の現場より～発掘・復元最前線 第37回 太田城」（2021年）、『太田城跡 常陸太田市内遺跡調査報告書 第17集』（常陸太田市教育委員会、2022年）

森木悠介(もりきゆうすけ)

現職：東海村立図書館司書

出身地：茨城県日立市 出身大学：茨城大学大学院人文科学研究科

主な業績：「戦国期佐竹氏の代替わりについて―義重から義宣への家督交代を中心に―」（『茨城県立歴史館報』第43号、2016年）、「常陸府中合戦の実態と大掾氏」（『常総中世史研究』第9号、2021年）

山川千博(やまかわちひろ)

現職：大田原市産業文化部文化振興課学芸員

出身地：福島県いわき市 出身大学：茨城大学大学院人文科学研究科

主な業績：「東国の戦乱と「佐竹の乱」」（高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、2017年）、常陸大宮市史編さん委員会編『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』（常陸大宮市、2023年、分担執筆）

藍原怜(あいはらりょう)

現職：那珂市総務部

出身地：茨城県水戸市 出身大学：茨城大学大学院人文科学研究科

主な業績：「『小野崎家文書巻』調査報告」（那珂市歴史民俗資料館編『『小野崎家文書巻』調査報告書』那珂市教育委員会、2019年）

青木義一(あおきよしかず)

元職：日本原子力研究開発機構 核燃料サイクル工学研究所 保安管理部長

出身地：長野県長野市 出身大学：名古屋工業大学大学院工学研究科

主な業績：茨城城郭研究会編『続・図説 茨城の城郭』（国書刊行会、2017年）、同編『【改訂版】図説 茨城の城郭』（国書刊行会、2017年）、同編『図説 茨城の城郭3 県北編』（2022年）

五十嵐雄大(いがらしたけひろ)

現職：嵯峨神社宮司

出身地：茨城県常陸太田市 出身大学：茨城大学教育学部

主な業績：茨城城郭研究会編『続・図説 茨城の城郭』（国書刊行会、2017年）、「久慈郡千寿村千手観音堂棟札写」（『常総中世史研究』第12号、2024年）、「大戸城跡の歴史とその構造」（『常総中世史研究』第10号、2022年）ほか

趣旨説明

2018～22年度「茨城県中世城館跡総合調査」

- ・ 5つの地区部会に分かれ、分布と縄張りの調査
- ・ 中世史（文献史学）、考古学、城郭史（縄張研究）
発掘調査→実測図 歩測→縄張図 + 文献史料に見える城郭
- ・ 1135ヶ所の中世城館跡の分布を確認 ※1979年には529ヶ所
- ・ 新たに673ヶ所を図化

☞ <http://doi.org/10.24484/sitereports.131674>

（全国遺跡報告総覧／奈良文化財研究所）

☞ 『茨城県中世城館地図－県央・県西編』／『同一県北編』

「茨城県中世城館跡総合調査」の成果報告会

- ・ 2023 [県央編・県西編] 2024 [県北編] [県南編]
2025 [県南・鹿行編]
- ・ 報告①で調査区全体を概観 ➡ 分布
- ・ 報告②～④で個々の城館の構造を踏まえた研究成果 ➡ 歴史/縄張り/構造
- ・ パネルディスカッション

近年の城郭史研究から

- ・ 年代 → 編年 ⇔ 縄張り (構造)
 - ・ 惣構えや平地居館、根小屋 … 歴史的景観の中で
 - ・ 戦国領主の「領」の構造、境目の城、城郭群
- ⇒ 個別城郭研究だけではなく、地域の政治史の中で、社会史として

成果報告会の前に、記念講演「それからの佐竹氏」（金子拓）

- ・ 佐竹家旧臣が数多く分布した常陸大宮市での開催を記念して
- ・ 佐竹氏秋田転封という大事件

それからの佐竹氏 — 常陸から出羽へ —

東京大学史料編纂所

金子 拓

はじめに

慶長7年（1602）における佐竹氏の常陸から出羽への移封

佐竹家中の武士たちは、主家の出羽移封にさいし、どのような行動をとったのか
（どのようにして常陸から秋田へ移ったのか）

子孫たちは、先祖の常陸から秋田への移動をどのように伝えたのか

『元禄家伝文書』（秋田県公文書館所蔵）を素材に見てゆく

元禄期の秋田藩における修史事業のさい、藩士諸家から藩の御文書所に提出された系図・由緒書・伝来文書の写。総数 2506 点。元禄 10-11 年（1698-99）提出分が 86%

常陸から出羽に移ったのは、提出者の曾祖父・祖父の代

1. 佐竹氏出羽移封の概要

慶長7年

3月7日 義宣伏見到着、家康・秀頼に謁見

4月28日 伏見屋敷の普請費用を国元から取り寄せる

5月8日 上使榊原康政・花房道兼が義宣に出羽移封を申し渡す

5月12日 伏見から水戸へ飛脚を発する（21日水戸、23日赤館到着）

5月15日 義宣、家老和田昭為に国替の庶務を指示

5月18日頃 移封先が秋田であることが判明

6月14日 義宣、和田昭為に領地請取を指示

6月26日 和田昭為・川井忠遠、国元を出発（7月23日到着）

7月下旬 幕府に常陸の領国引き渡し

7月27日 家康より領地判物を給される

7月29日 義宣伏見出発（江戸経由で出羽に入るか）

8月2日 湊城請取

9月17日 義宣、湊城に入る

移封の通達から秋田下向をめぐる家中の伝承（白土大隅 A288.2-1973 以下『元禄家伝文書』所収史料は、秋田県公文書館の整理番号のみを表示）

一、慶長六年五月拾七日、於京都為御上使榊原式部太輔・花房助兵衛殿御越被成、出羽国秋田へ御国替之段被仰渡候、同五月廿一日ニ御国替之旨御飛脚候而、水戸へ申来候、赤館へハ同月廿三日巳ノ刻ニ申来候由、

一、同六月廿六日、和田安房守殿・川井伊勢守殿赤館発足、岩瀬ニ二日、福嶋ニ四日、白石ニ七日、最上ニ五日ノ逗留ニ御座候由、

一、白土大隅・桐沢久右衛門、出羽国為御案内、御先へ罷下り、飛脚を以秋田之

様子申上候、天童原と申所ニ而安房守殿・伊勢守殿へ飛札指上申候由、同七月廿三日、右両人之衆秋田へ下着被致候由、

一、秋田城之助殿御城ニハ秋田右近・同兵右衛門と申衆兩人上下四十人ほとにて居申、御城早々相渡申度由申ニ付、同八月二日巳ノ刻ニ、安房守殿・伊勢守殿為代官白土大隅御城請取申候由、同二日午ノ刻より赤館衆・長倉衆と替々御入部前御城御表五日五番つゝ相勤申候由、

一、屋形様同年九月九日御入国被遊候由、

2. 佐竹義宣と同時期に下向した家臣たち

○義宣に先立ち下向し所領請取（田中治継 A288.2-2162）

慶長七年秋源君遷封羽陰秋田、当時任嚴命、以先立而下向スト云、故於羽陰土崎之浦賜俸禄八十石、是領地請取之辛勞ニヨツテ也ト云、

○湊城請取（沼田信易 A288.2-2360）

一、(...) 嫡子助左衛門（信易）家督にて、御国替之節部垂^ら御先ニ助左衛門共ニ八人罷下、湊御城請取相勤申候由、御当国へ御移被遊候而、本地五十石被下置、仙北之内淀川増田へ被遣、二三ヶ年被指置候由、備後（父信常）義者御跡^ら罷下り候故、本地三拾石被下置候、

○「御草分」の御供

落合経通（A288.2-1473）慶長七年秋田御移之刻、常州南郷ヨリ御草分ケ御供仕候、「御草分」の恩賞

小池某（A288.2-1695）慶長七年御国替之刻、病氣ニ御座候故、式年御跡^ら参申、則向右近指南ニ□仰付候、(...) 国替之時分、御草分之御供仕参候もの二者□知行拾石侍ニ被成下候時、壹人御扶持指□領仕候、私共先祖之者ニハ、御跡^ら参候故ニ、式人御扶持^ら領仕、右之ものとも同前ニ侍ニ被仰付候、其時分^ら惣領御扶持被下置候

豊田時勝（A288.2-2270）於常州羽黒ニ御足輕御奉公仕候、慶長七年御国替之刻、病氣ニ御座候故、式年御跡^ら参申候、則向右近指南ニ被仰付候、

一、御国替之時分、御草分御供仕参候者ニハ拾石^ら領仕、御足輕御免侍ニ壹人御扶持方指添被下置候、

一、私先祖ニハ式年計遅成参候故、式人御扶持方^ら領仕、右之者同前ニ御免侍ニ被仰付候、

※「草分」御供は家の名誉であり、とくに所領が厚く与えられた

○佐竹氏の秋田・仙北入部への抵抗

①六郷

石井掃部（A288.2-940）

一、(...) 慶長七年御当国エ御供仕罷下り候、其節駿河名ヲ改メ、掃部ト申、御知行四拾五石^ら領仕、角館ニ居住致候、其砌り義重様角館近ク本堂村ト申所ニ被遊御座節、慶長七年十月ノ比、白山石村内膳ト申者大将ニテ百姓共蜂起仕、大勢義重様エ罷向イ候由承り、角館^ら石川掃部ヲ始メ其外何モ走参、防キ候得ハ、一揆ノ者トモ不相叶、方々エ引退ク、其後十二月、角館町へ忍ヒ入候処ヲ

何モ出合候テ、大将内膳ト申百姓ヲ始メ、其外ノ者共モ搦捕、岩瀬川原ニテ八十三人張付ニ被懸候、

太田勘兵衛 (A288.2-1271) 闖信公于仙北郡六郷、此時寇族蜂起、闖信公之館、勘兵衛防之、被創而卒、

②角館

大瀬主水 (A288.2-1261)

一、私祖父大瀬主水事 (...) 慶長七寅之年 義宣公様常陸^方出羽江御国替ニ而御下向之砌、何とぞ致御供仕度存、須田美濃守手ニ付、御道具ヲ持罷下候所ニ、角館百姓共依蜂起仕、為御退治之美濃守被仰付候刻、主水事も美濃守手ニ付、角館江罷越申候、百姓共大勢一烈仕、美濃守在所江押寄申候へ共、不相叶、引退申候、其時分主水事も随分働申候由、其後美濃守方便を以統領之百姓共四拾人余搦捕、岩瀬川原礫被掛置、其外在々相残悪党共数拾人尋出ニ打首仕、以後角館村々御静謐ニ罷成候由、

掛札家宗 (A288.2-1553)

一、(...) 慶長七寅年常陸^方御当国へ御下向之砌、何とぞ御供仕度存、御道具持御草分之御供仕、御足輕役致、須田美濃守手ニ付罷下、角館へ罷通之時、角館并近郷之百姓共美濃守下知ニ随不申、剩大勢一烈仕押シ寄せ、一乱有之時分、弥八郎(家宗)も働相勤之由、美濃守行を以統領たるもの四拾人余召捕、礫ニ被懸置候、依之相残百姓等静り申候由、

③阿仁

赤坂下総 (A288.2-733) 慶長七年御国替之節、下総儀手賀^方罷下、御当国御知行五百石拝領仕候、其刻大阿仁・小阿仁・南比内・北比内請取ニハ忍大隅・川井若狭・近藤六郎兵衛・同木工左衛門、右四人被遣候由、然所ニ右之在所御手ニ随ひ不申、違乱御座候ニ付、為御仕置之下総を被仰付、同年七月中大阿仁之内米内沢之城へ罷移候、又同年九月中彼在所江罷移候共申伝候、米内沢先方之城主ハ秋田城之助殿之御家来嘉成右馬頭季清と申もの致居住候由、無間も先方之侍百姓共大勢一揆騒動仕、下総罷有候米内沢之館を取巻、三日三夜及大乱ニ候而、危く御座候処ニ、先方之内奈良岡主馬と申侍を致内通、一身和談之計略仕、主馬母を城中へ入置、徒頭侍之内嘉成助左衛門・大淵弾兵衛・本間大学・小淵因幡・同兵部・相馬伊勢と申者右六人搦捕、米内沢之内山崎と申所ニ而成敗仕候、因茲右之大乱相静候、

3. 慶長七年以降に下向した家臣たち

○城の引き渡し任務

八嶋光朝 (A288.2-2950) 慶長七年義宣公羽州秋田被封時、依命義重公残太田御城番勤之、御跡羽州仙北六郷下着、奉仕義重公、

○下向の順番

石井忠実 (A288.2-849) 私曾祖父石井主殿忠実慶長七年寅年御国替ニ付同八年卯年ニ番下リニ罷下、御知行三拾石被下置、

西宮藤則 (A288.2-2330) 私先祖西宮佐次右衛門、御国本^方慶長九年三番下リニ罷下、

御知行式拾石拝領仕、 ※兄藤道は7年に下向、末弟藤国は「御国替之時七歳ニ而、自御跡罷下」

○病気を理由に

赤坂種光 (A288.2-738) 種光事、御国替ノ節ハ病氣故仙台工罷越、養生仕、病氣本腹仕、御当国工罷下、御知行八拾石被下置、

石井忠国 (A288.2-856) 此代ニ常州ヨリ御国替之時分大病故三年以後ニ御当地江罷下、

大部俊忠 (A288.2-1332) 慶長七年寅秋出羽秋田工御国替之時、蔵人(俊忠)儀相煩、御供不仕、翌年罷下り、御知行三拾石拝領仕候、

岡貞守 (A288.2-1368) 御国替之砌相煩申ニ付、嫡子助十郎拾七歳ニテ御供仕、翌年親縫殿之助迎ニ罷登申度旨願申、則御暇被下置、罷登候、道中ニテ相果申候、同年縫殿之助罷下り、御扶持御給被下置候、 ※貞守嫡男助十郎が迎えに来る途中で病死

宮崎直治 (A288.2-2834) 御国替ノ節長病故不罷下候、

御国替五年御跡ヨリ若輩ニテ罷下り、御足輕相勤、(嫡男直定)

吉沢清邑 (A288.2-3055) 御国替之節病氣故御供不仕候、於常陸卒ス、

御国替之翌年罷下り、御知行三十石拝領、(嫡男清似)

○幼少を理由に

泉市兵衛 (A288.2-1009) 一、右帯刀左衛門子共(市兵衛)八歳之時、母同道仕御国替一兩年以後御当国江罷下、

佐川五右衛門 (A288.2-1825) 慶長七壬寅年御国替其砌若輩ニ而御供不仕之由、御跡ヲ罷下、三人御扶持拝領仕候、

○老齡を理由に

安立某 (A288.2-776) 常陸ヨリ老躰故閑居ニ三年以後御跡ヨリ参、七十余而卒、(子の守吉はあとから下向)

○時間を経過しての下向

石井忠秋 (A288.2-847) 御当国御下而六年目ニ罷越、四人御扶持拝領、

舟尾次郎兵衛 (A288.2-2629) 祖父舟尾次郎兵衛、御国替拾年目御跡亥ノ年(慶長16年力)ニ罷下、御訴詔申上候得者、御知行代三人御扶持方被下置候事、

○傍輩の勧めで下向

村上定広 (A288.2-2847) 慶長六年常陸御国替之時御供不仕、翌年田代新右衛門儀、白井ニ附依油緒常州江以以飛脚罷下可然由申遣ニ付、次郎左衛門(定広)飛脚同前、室・嫡子曾右衛門・次男四兵衛召列、秋田江下着、新右衛門処ニ居、其後新右衛門古主膳殿江次郎右衛門儀、水戸御譜代旨申立、五人御扶持被下、

○いったん常陸へ戻る

羽生秀政 (A288.2-2527) 慶長七壬寅年御国替之節、従伏見羽州秋田工御供仕候、関東土浦ニ父老人ニ而居住仕候、為見届同年御暇拝領罷登所ニ、父以之外ニ相煩、依難見放テ付添居申内、父病死仕、年之内之御暇申上、歳ヲ越罷下ル儀如何ト延引年月ヲ送り候処ニ、慶長十九甲寅年撰州大坂御陳之砌、大坂迄相詰、御訴詔仕、梅津半右衛門指南ニ而被召出、御奉公罷出ル由申伝候、

○常陸から出羽への移動径路

小川左近 (A288.2-1408) 慶長年中義宣公御国替之時、久保田之城ヲ可請取由ヲ命ゼラレ、先達テ秋田ニ下リ、其事終テ又常州ニ趣ク、於篠屋峠義宣君ニ途中ニ謁ス、則慇懃ノ上意ヲ承リ、并黄金ヲ下シ賜リ、又速ニ常陸ニ到テ在城ヲ可引払由ヲ命ゼラル、於此左近小呂藤小川ニ帰城ス、不幸ニシテ大病ニ侵サレ、重テ羽州ニ下向スルコト能ワズ、於水戸卒ス云々、

舟尾義継 (A288.2-2637) 慶長七年義宣公御国替之時、義継出羽国最上郡迄下着、然処故有而立返、蟄居米沢、

○下向をめぐる家中各家の対応

佐川仁右衛門 (A288.2-1831)

一、(...) 兄之伊予儀ハ御国替之時分御供仕罷下リ、御知行拝領仕、横手給人ニ而罷有申候事、

一、仁右衛門ハ次男ニ御座候故御供不仕、御国替之以後罷下リ、新田拾石并墨印頂戴、御免奉公仕、

沢畑定富 (A288.2-1931) 御国替以後慶長九年自常州当国山乏郡六郷、奉仕義重君、

※妹が「水戸黄門公御家人高橋氏妻」、女性が常陸に残る

○佐竹氏の遅参家臣対応

根元五郎左衛門 (A288.2-2386)

一、私祖父根元五郎左衛門と申者、関東方慶長八年卯ノ年罷下申候時分、役内村之内落宮内と申所ニ御札被立置候ハ、関東御譜代ニても御跡方罷下候者をハ不被召出候段御条目ニ御座候得とも、秋田へ差仕候得ハ、其砌御城御普請御座候付、御普請相勤御奉行方之御目ニも付申様ニと覚悟仕、大小指申、深あミ笠にててんびん持申候処ニ、大奉行川井左太夫尋被申候ハ、大小にててんびん持申候ハ何者ニ候と穿鑿被致候故、右之次第申上候得者ハ、則御披露を被成置候処ニ、為上意と左太夫被申渡候ハ、御普請之儀ハ御免被成下候間、町宿へ罷下、休息可仕被仰付候、追而被仰渡候者、雄勝ノ内寺沢村ニ而御本田拾四石宛被下置、湯沢ニ可罷在由被仰付候、

星喜右衛門 (A288.2-2667)

一、秋田江御国替之刻、祖父星喜右衛門与申者、御譜代ニ御座候、御跡方罷下候処ニ、役内村之内落宮と申所ニ御札被立置候ハ、此末御国方罷下候者、御譜代ニ候共不被召出之由御条目ニ御座候得共、湯沢へ差仕罷在之由、

一、右星喜右衛門儀、萩屋左近ニ親類ニ御座候故、隠居名代ニ本名ニ而被立下置度段御訴詔申上候得ハ、無御相違本名ニ而拾石被下置候故、御奉公仕候、

鈴木大蔵 (A288.2-1998) 常州水戸方御当国秋田江御国替被遊候ニ付而、御跡方罷下リ申候故、不被召出、牢人与罷成、御当国之内角館ニ住居仕り候、

野内忠家 (A288.2-2441) 御国替之砌病氣故御供不申、一兩年遅ク罷下リ申候而、右之品々和田安房守殿を以申上候へ者、被仰渡候ハ、早ク罷下リ候ハ、皆並ニ御配当可被下置候へ共、遅ク罷下候間、只今三人御扶持方被下置候、末々者三拾石之代と相心得申様と被仰渡候、

4. 運命を変えた出羽移封

○引越後急死

上平義則 (A288.2-1174) 御国替之時分、上平右衛門大夫儀騎馬ニ而御先江参り候之所ニ、野代ニ而頓死仕、子共幼少ニ罷成ニ付而御扶持方分ニ五拾石被下置候而、于今所務仕候、右衛門大夫死去之節、和田安房守所^方中田駿河所江状遣候、右衛門儀駿河姉聲ニ御座候故、右之状于今所持仕候間、写持下候、

上平右衛門方仕合承候て、無是非存候、当国迄被参候而如此儀忠信御申之所、川伊へも可申合候間、御心安候、恐々謹言、

七月十三日 昭為 (花押影)

「(墨引)

中田駿河守殿参 和安」(※『秋田藩家蔵文書』六にも収録)

○強盗に遭う

大森淡路守 (A288.2-1336)

一、従常陸御当国江御下り被遊候節、淡路嫡子大森助拾郎事、為跡仕舞之在所ニ指置、次男左平治と申者若輩之時分淡路召連御供仕、罷下、御配当五拾石淡路拝領仕、

一、右申上候淡路嫡子助十郎事、在所仕舞罷下申所ニ、最上之内ニ而強盗ニ出合申候而、釵難ニ而相果申候故、先祖隨而御奉公之上拝領仕申候御証文等茂紛失申候由伝承申候御事、

小川義平 (A288.2-1412) 御国替之時、御供仕罷下候所、半途ニ而病氣、其上国本之百姓遺恨有、追来、旅宿ニ火を懸申候故、此時系^凶御証文等焼失仕候、病氣も不得快氣、常陸へ罷帰、相果候、

根元長門 (A288.2-2429)

一、私曾祖父三郎右衛門、慶長年中御国替之時御供仕、御国へ罷下候由、三郎右衛門親を者長門と申候而、関東ニ而隱居仕候由、尤三郎右衛門妻子・長門も関東ニ残り居申候ニ付而、翌年御暇ニ而、関東へ親・妻子召連ニ罷登候ニ、仙北之内ニ而強盗ニ合申候而、働候へ共多勢故相果申候、御公儀御穿鑿被成下、其所之強盗者共三十八人はり付ニ被仰付之由、関東^方長門嫡孫(為通)ニ歳ニ罷成候を召連罷下候而、品申立候へ者、先祖忠心能御奉公仕由ニ而、幼少之者ニ御配当五十石被下候由申伝候事、

○移動途中で罹病

君田信濃 (A288.2-1676) 先祖君田信濃と申候者、蘆名盛重公江江戸崎にて御奉公罷出候、御国替之節御供仕罷下^口处、半途ニて病死仕候、

高畠長基 (A288.2-2103) 慶長七年秋田御下向之年、病氣ニ而罷下不申候、翌年病氣少々得快氣を、妻子同道罷下候处ニ、中途ニ而病死仕候故、妻者幼少之子共とも召連、常陸江罷帰候、嫡子今右衛門(長政)十八之時罷下、小田野刑部殿頼入御奉公ニ罷出候、二男正喜(長治)事、常陸ニ而一向坊主ニ罷成、寺ヲ持居申候、江戸江用所候而参候处ニ、屋形様御在江御供ニ小田野刑部殿御登之由承候故、兄今右衛門儀承可申与存、刑部殿江見舞仕候、其節御申二者、御普代之義ニ候間、御奉公ニ出可然由被仰候、思召過分ニ存候、任其意ニ可申候得共、寺を渡不得者、

不罷成候、末々如何可在之茂知不申候間、罷成間鋪存候由申上候得者、河辺罷帰候時分、為御知可申由被仰候ニ付、尤帰候時分参上仕候、其時分御申二者、御前ニて御咄二次第を申上候得者、御意二者、寺を渡罷登之可被召出由、坊主ニ候間、御茶道ニ可被召仕由御意候間、何とそ寺相渡登可申由被仰候、難在奉存、罷帰、住寺を引付罷登、刑部殿頼入、御茶道之御奉公二年式拾式之時罷出候、然者押付母御屋敷江尋参候、其断御披露申上候得者、秋田江同道罷下、差置登可申由候て、御暇被下候故、同道罷下、兄今右衛門預置、則罷登申候、

山方定信 (A288.2-3005)

- 一、右治部左衛門(定泰)子治部左衛門(定信)儀、慶長七年御国替之砌御供仕罷下り申候所ニ、武州葛飾郡栗橋ニ而病死仕候、実子五郎兵衛儀、幼少故水戸ニ残置申候御事、
- 一、右治部左衛門子五郎兵衛(定忠)、年十二ニ罷成候時、慶長拾貳年ニ御国へ罷下申候、右者同名能登頼ニ而、町田小左衛門江戸へ罷下候節、水戸へ立寄、小左衛門同道ニ而御当国へ罷下り、能登養育致、水戸ニ而之由緒数度申立候得共、幼少剩御跡へ罷下申故、御取上ケも無御座、依是小場源左衛門殿へ能登御頼申上、元和三年ニ御歩行御奉公ニ被召出、

5. 出羽にいた武士たちの去就

○秋田家の家臣の三春移居

齋藤吉久 (A288.2-1806) 秋田城之助実季公譜代、実季公三春工国替之節牢人、

長男久俊 実季公国替之節三春工御供致候由申伝候、

次男久忠 父同牢人、苅和野ニ住ス ※久忠子の久親が佐竹家に召抱えられる

※長男がそのまま秋田家に従い三春へ。当主と次男が出羽に残る。

西嶋又二郎 (A288.2-2320) 私曾祖父西嶋又二郎儀、秋田城之助殿御家来ニ而、知行百石拝領仕、御墨印所持仕候、城之助殿儀御国代被仰付、又二郎儀も御供をも可仕处ニ、殊外困窮仕、御当地ニ罷有候、浪人中疊細工就被召仕、御家老向古右近様へ品々申上候得ハ、被聞召分被仰上、拾人御扶持拝領仕、御疊刺御奉公仕由ニ御座候、

主要参考文献

- ・水戸市史編さん委員会編『水戸市史』上巻(1963年)
- ・森木悠介「激動の時代を乗り越え、秋田二十万石の大名として存続」(佐々木倫朗・千葉篤志編『戦国佐竹氏研究の最前線』山川出版社、2021年)
- ・金子拓『記憶の歴史学 史料にみる戦国』(講談社選書メチエ、2011年)
- ・金子拓「松平忠直の隠居と秋田藩—「越前御陣」の記憶—」(『東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-2 近世初期の大名と情報』研究代表者佐藤孝之、2016年)

県北地区の中世城館－近年の発掘事例を中心に－

常陸太田市教育委員会

山口 憲一

はじめに

本報告は、「茨城県中世城館跡総合調査」（以下、「総合調査」という。）において県北地区として対象となった7市1町1村（北茨城市・高萩市・日立市・ひたちなか市・那珂市・常陸太田市・常陸大宮市・大子町・東海村）の城館についての概要及び近年行われた発掘調査の事例を紹介するものである。



1. 調査方法について

①遺跡として登録されている中世城館跡の把握

⇒市町村からの「中世城館跡調査カード」の提供をもとにした現地調査

②城館跡に関する地名や伝承等の調査

⇒城館にまつわる字（あざ）や地域に伝わる話などをもとに地形を確認しながらの現地調査

③城館跡に関する文献・古文書の収集・解読

⇒史料部会による一次資料・二次資料の集成をもとにした現地調査

【②について】

県北地域は調査エリアの多くを山間部で占めているため、“赤色立体図”といわれる地形図が活躍した。現地をやみくもに踏査していても、城館跡を発見することは困難であり、時間や労力が多く割かれる調査となってしまう。そこで、城館跡に関する情報と赤色立体図を用いて、人工的に改変されている部分に当たりをつけて、現地踏査するという手段をとった。

この方法は、城館に関する情報がない場所こそ有効な手段であるため、新規発見の増加につながった。

発見された場所が中世城館であるかどうかは当然ながら慎重な検討が必要であるが、城館の可能性のある場所も含めて洗い出されたことは今回の悉皆調査においては有意義な成果となった。

【用語解説】赤色立体図

地形の可視化手法の1つで、2002年アジア航測が発案(特許(第3670274号等))。航空レーザー測量により得られた、数値標高モデルのデータを用いて作成された、方向依存性がない地図であり、どの方向から見ても立体的にみえ、平坦な面や起伏がはっきりと表れるため、古墳や人工的に改変されている場所などが一目でわかる。スマホアプリ「スーパー地形」でも閲覧できる。

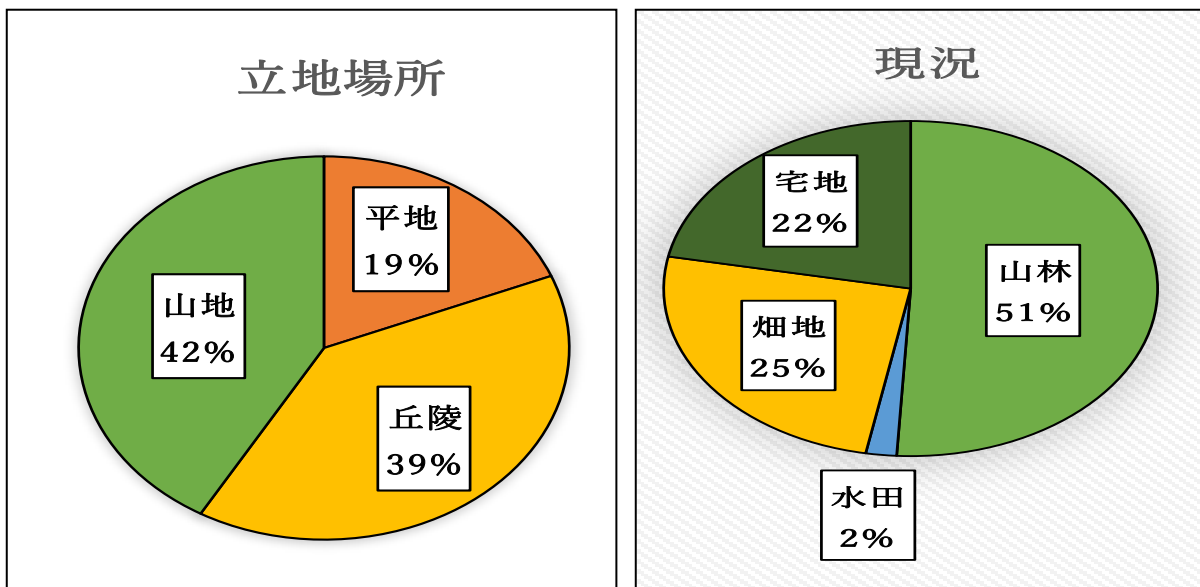
2. 城館数について

総合調査で判明した県北地区の城館数はおおむね以下のとおりである。

(報告書付属のDVD「城郭跡等一覧表」より)

市町村名	周知の包蔵地 城館跡	調査で判明した 城館跡	合 計
北茨城市	9	11	20
高萩市	11	4	15
日立市	16	10	26
ひたちなか市	28	2	30
那珂市	53	0	53
常陸大宮市	45	57	102
常陸太田市	55	24	79
大子町	29	13	42
東海村	2	2	4
合 計	248	123	371

※調査で判明した城館跡は、城館跡である可能性があるものや、遺構自体は湮滅し、伝承のみ残る場所も含めた数である。



県北地域の城館の特徴は、山々に囲まれている場所であることが意識されて城館や砦が造られていることである。特に山間部は、自然地形を巧みに利用し、防御性を高くしていることは言うまでもないが、人の動きが察知できる位置（街道沿いや道の中継点など）や城館や砦同士で連絡がとれる近い位置に配置されていることが城跡が多く存在している要因とも考えられる。なお、位置については、配布されている地図をご参照ください。

『総合調査報告書』より抜粋

【高萩市】

0260 龍子山城と周辺城館（0271 丸山 0272 上宿 0273 弾正屋舗）
0263 中の館 と周辺城館（0264 内の草古館 0265 田の草古館
0266 明神山古館 0267 小川崎古館）

【日立市】

0280 大窪城 と周辺城館（0279 大窪天神山城 0281 大窪愛宕山城）

【常陸大宮市】

0070 下檜沢城 と 0078 下檜沢向館
0071 上檜沢館 と 0111 上檜沢田尻城
0072 高部館 と 0077 高部向館
0074 河内城 と 0079 河内城向館Ⅰ、0108 河内城向館Ⅱ
0081 川崎城 と 0087 川崎向館
0083 小舟城 と 0112 小舟城向館
0084 大岩城 と 0114 大岩関沢城
0092 入本郷館 と 0123 入本郷川向館

【常陸太田市】

0127 茅根城 と 0178 茅根城向館
0130 小野崎城 と周辺城館（0179 八百岐館 0131 今宮館 0129 小野館）
0155 利員龍貝城と周辺城館（天満出城・沢泉寺砦・長者窪砦・東出城・
赤土館・上利員三峰砦）
0156 金砂城と周辺城館（0180 上宮河内愛宕館 0181 赤土坏館）
0169 小里城と周辺城館（0176 羽黒山館 0174 館の台館 0182 小里富士山城）

【大子町】

0004 町付城と 0034 町付向館、0035 大草砦
0028 頃藤城と周辺城砦群（0030 頃藤要害、0027 頃藤古館、0031 頃藤天道山城）

3. 中世城館跡の発掘事例（県北編）

北茨城市

遺跡名 **関本中栗野城跡**（せきもとなかあわのじょうあと） 番号 0259
調査年 2024年4月～9月
調査機関 公益財団法人 茨城県教育財団
調査成果 曲輪や堀跡などの施設をはじめ、自然の要害を巧みに利用した室町時代の城跡を確認。切岸や自然の崖上の先端部に位置した第1号・第2号・第8号曲輪では、礫がまとって出土、敵に対する投石（石礫）として持ち込まれた可能性がある。

日立市

遺跡名 **山尾城跡**（やまのおじょうあと） 番号 0288
調査年 2015年7月～2016年10月（第1次）・2020年2月～5月（第2次）
調査機関 有限会社勾玉工房
調査成果 城跡に関する確認された遺構は、郭や堀、土塁などである。第2次調査では、主曲輪とⅡ曲輪を分ける堀やⅡ曲輪内区画の存在が明らかになるとともに、本城域の変遷が三期に区分されることが判明した。Ⅰ期は14世紀後半、Ⅱ期は15世紀中葉～16世紀後半、Ⅲ期は17世紀前半である。

遺跡名 **要害城跡**（ようがいじょうあと） 番号 0283
調査年 2016年11月～2017年1月（第3次）・2017年9月（第4次）
調査機関 有限会社日考研茨城
調査成果 第3次調査は、第2曲輪と推定される北部土塁の調査で、2条並行する土塁間に堀が掘削されていることが確認された。第4次調査では、城跡北東部のⅡ郭（第2曲輪）の調査で、第1・2次調査で確認されていた堀跡が確認され、堀跡の様相が改めて把握された。

常陸大宮市

遺跡名 **石沢館跡**（いしざわやかたあと） 番号 0062
調査年 2020年12月～2021年10月
調査機関 株式会社地域文化財研究所
調査成果 調査では、掘立柱建物2軒、方形竪穴遺構8基、地下式抗2基、溝跡1条などが検出された。調査区から検出された遺構群と館跡の関係は明らかではない。調査区の性格は小規模な屋敷地を内在し、東に位置したとされる街道と関わりながら主に15世紀後半～17世紀前半にかけて営まれた石沢館跡外縁の宿的な集落と考えられる。

常陸太田市

遺跡名 **太田城跡** (おおたじょうあと) 番号 0137
調査年 2019年6月～9月(第1次)・2020年4月～11月(第2次)
調査機関 株式会社東京航業研究所(第1次)・有限会社勾玉工房(第2次)
調査成果 調査区は、太田小学校敷地の北東側に隣接する敷地の一部である。
確認した堀跡5条の内最大のものは、第2号堀跡である。形状は薬研堀、確認された規模は、幅8m、深さ4.7m、全長170mのクランクを持つ南北に縦断する堀跡である。築造時期は、16世紀前半頃と思われる。

那珂市

遺跡名 **堀の内館跡** (ほりのうちやかたあと) 番号 0187
調査年 2016年8月～9月(第2次)
調査機関 株式会社日本窯業史研究所
調査成果 調査では、堀跡2条、溝跡1条、土坑20基が検出された。堀跡は2条とも箱薬研状である。外郭の堀跡は南北ともに調査区外に延び、内郭の堀跡は他の堀跡に連結していない。

遺跡名 **藤咲丹後館跡** (ふじさきたんごやかたあと) 番号 0194
調査年 2018年1月～2月
調査機関 関東文化財振興会株式会社
調査成果 調査では、中世の遺構は確認されなかったが、炉を持つ5世紀代、竈を持つ6世紀代の竪穴建物跡2軒、縄文時代に属すると考えられる土坑6基が検出された。これまで中世の城館として周知されていたが、縄文・古墳時代の遺構・遺物が確認されたのは新発見である。

遺跡名 **仲の房館跡** (なかのぼうやかたあと) 番号 0209
調査年 2020年3月
調査機関 有限会社日考研茨城
調査成果 堀跡1条、土塁1条などを確認した。堀跡は幅1.8m、深さ0.9mを測り、断面形は逆台形の箱薬研を呈する。土塁の高さは1.2mを測り、遺構としてピット列が確認でき、中世の方形館跡の典型を示している。

遺跡名 **宮田掃部助館跡** (みやたかもんのすけやかたあと) 番号 0197
調査年 2017年11月～2018年4月(第1次)・2021年10月～11月(第2次)
調査機関 株式会社日本窯業史研究所
調査成果 第1次調査では、堀跡6条、土塁跡4基などを確認。堀跡は地下水の出水が多くみられ、周辺の溜池と関係した水路として利用された可能性が考えられる。また、地表面で確認できていた堀跡や土塁の下層からは、さらに古い時代の堀跡や土坑等が検出された。堀跡や土塁は数

回にわたって改修された痕跡がある。

第2次調査では、館跡の北辺外郭の堀跡1条、溝跡1条及び土塁跡1基を確認した。また、近世以降の土葬墓と考えられる土坑群も確認された。

遺跡名 **額田城跡** (ぬかだじょうあと) 番号 0189
調査年 2023年 本郭の測量調査・2024年 二の曲輪の測量調査
調査機関 那珂市教育委員会・(有)三井考測
調査成果 資料に掲載されている額田城跡の報告をご参照ください。

東海村

遺跡名 **白方古墳群** (しらかたこふんぐん) 番号 0303
調査年 2020年6月～7月
調査機関 株式会社地域文化財研究所
調査成果 確認された遺構は、堀跡1条、ピット26基。堀は幅約7m、深さ約2.7mの逆台形状で防御を意識した構造で、直線状に60m以上延びる。当地の南東300mの豊受皇大神宮には白方城が存在したとされる。

遺跡名 **石神城跡隣接地** (いしがみじょうあとりんせつち) 番号 0302
調査年 2020年9月～12月
調査機関 東海村教育委員会
調査成果 確認された遺構は、堀跡1条。堀は幅約7m、深さ約2.6mの逆台形状で、石神城跡外郭に関連する堀の可能性がある。

遺跡名 **石神城跡** (いしがみじょうあと) 番号 0302
調査年 1989・90年、2023年12月、2024年1月
調査機関 東海村教育委員会
調査成果 資料に掲載されている石神城跡の報告をご参照ください。

おわりに

県北地区は、佐竹氏の本城であった太田城が存在することもあり、領主の館以外にも戦のために造られた城館や砦、見張り台などが山間部には数多く残されていることが判明した。発見された遺構が、考古学的側面から中世城館に属するものであるかどうか検討していかなければならないという課題はある。近年は、発掘調査以外にも測量調査の一つである微地形測量を用い、測量図を分析することで、多くの情報を得ることができるよう、そういった技術の発達により得られた成果が今後の茨城県の城郭史研究に活かされることを期待したい。

【活用事例】 城館跡を後世につなぐ取組み （「茨城新聞」より抜粋）

主要参考文献

- ・茨城県教育委員会『茨城県の中世城館 茨城県中世城館跡総合調査報告書』2023年
- ・公益財団法人茨城県教育財団 調査成果展示会資料 2024年
- ・有限会社勾玉工房 Mogi 編『山尾城跡-日立市埋蔵文化財報告書第107集-』日立市教育委員会 2017年
- ・有限会社勾玉工房 Mogi 編『山尾城跡（第2次）-日立市埋蔵文化財報告書第115集 日立市教育委員会 2020年
- ・有限会社日考研編『日立市河原子古墳群・要害城跡 発掘調査報告書-日立市文化財調査報告第109集』日立市教育委員会 2017年
- ・有限会社日考研編『日立市要害城跡（第4次）発掘調査報告書-日立市文化財調査報告第112集』日立市教育委員会 2018年
- ・株式会社地域文化財研究所編『石沢館跡-茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第34集-』常陸大宮市教育委員会 2021年
- ・株式会社東京航業研究所編『太田城跡-常陸太田市内遺跡調査報告書第15集』常陸太田市教育委員会 2021年
- ・株式会社勾玉工房編『太田城跡-常陸太田市内遺跡調査報告書第17集』常陸太田市教育委員会 2022年
- ・東海村教育委員会『白方古墳群』2020年
- ・東海村教育委員会『令和4年度東海村内遺跡発掘調査報告書』2024年
- ・東海村教育委員会『石神城跡—茨城県那珂郡東海村所在中世城跡の調査—』1992年
- ・日本窯業史研究所編『堀の内館跡Ⅱ』那珂市教育委員会 2017年
- ・関東文化財振興会編『藤咲丹後館跡』那珂市教育委員会 2019年
- ・有限会社日考研茨城編『仲の房館跡発掘調査報告書』那珂市教育委員会 2020年
- ・日本窯業史研究所編『宮田掃部助館跡』那珂市教育委員会 2018年
- ・日本窯業史研究所編『宮田掃部助館跡Ⅱ』那珂市教育委員会 2022年

古文書・古記録が語る常陸北部の合戦と城館

森木悠介（東海村立図書館司書）

はじめに

・『茨城県の中世城館』では「文献資料一覧」のうち県北地域の一次史料・二次史料の集成を担当。

一次史料・・・当時の人物による書状、日記、棟札など。

→内容が主観的・断片的・簡略的なものが多い。無年号文書の存在。

理解・考察には知識・技術が必要。

二次史料・・・後世作られた系図、軍記、伝記、地誌、家譜など。

→年代順、項目ごとになっていることが多い。分かりやすい・読みやすい。

誤伝、誤写、作為などの可能性。

一次史料よりも史料価値は落ちる（ピンキリ）。評価が難しい。

⇔県内城館関係の書籍の多くは歴史部分の叙述を二次史料に依拠、出典不明な場合も（『日本城郭全集③』『日本城郭大系4』『茨城の城館一～四』『重要遺跡報告書2』『図説茨城の城郭 [正]・続』『茨城県の中世城館』など）。

→二次史料の記載内容を鵜呑みにはできないものの、城主・築城年代など二次史料に頼らざるを得ない側面があるのも事実。

⇒あくまで一次史料を主に置きつつ、二次史料で補強・補完していくべき。

★本報告の目的～「文献資料一覧」の活用～

一章では一次史料を中心に城館をめぐる常陸北部の政治史を復元・概観。

二章では史料集成の成果として、いくつかの城館について従来説の訂正を試みる。

※県北 - ○○、県北2 - ○○は『茨城県の中世城館』付属 DVD 所収「文献資料一覧」の番号を、自治体名の後の数字は同書における城館の通し番号を示す。

一章 城館をめぐる常陸北部の政治史

①平安時代末期・鎌倉時代初期——源平争乱の最中に起きた清和源氏同士の争い

治承4年（1180）11月、関東源氏の主導権を確立するため、源頼朝が平家方の佐竹氏を攻めた。佐竹氏の本拠太田城（常陸太田市：0137）は政庁としての位置づけが強く、佐竹氏5代秀義（代数は『佐竹家譜』に準拠）は金砂山城（同上：0156）を築き迎え撃ったが、一族の裏切りにより落城した。秀義は花園城（北茨城市：F10）

に逃れ、文治5年（1189）まで抵抗を続けた（県北2-16～20など）。

②南北朝時代——常陸北部の覇権をかけた南朝対北朝の争い

交通の要衝で南朝方が拠る**瓜連城**（那珂市：0238）が、佐竹氏ら北朝方との争点になった。建武3年（1336）2～12月まで花房山・大方河原、岩出河原、小里郷（いずれも常陸太田市）など周辺地域も含めて攻防が繰り広げられた。最終的に北朝方が**瓜連城**を攻略し、常陸北部における優位性を確立した（県北-5～12）。

③室町時代前期——佐竹の乱・第一期（佐竹宗家・鎌倉公方足利持氏VS佐竹一族・国人）

応永15年（1408）、佐竹氏13代義盛の後継者をめぐって佐竹氏の内乱が勃発した（県北2-69など）。佐竹宗家と山入佐竹氏を中心とする一族・国人の対立は、双方が鎌倉（古河）公方・関東管領上杉氏・室町幕府といった上位権力と結びつき、上位権力間の対立とも連動したため、断続的とはいえ長期にわたる内乱となった。

応永23年（1416）の上杉禅秀の乱後、鎌倉公方足利持氏や佐竹氏14代義憲は、禅秀派（反持氏・反佐竹宗家勢力）への弾圧を開始。同24年に**長倉城**（常陸大宮市：0043）の長倉氏、**利員城**（常陸太田市：0155）の山縣氏（河井氏とも）、**稲木城**（同上：0140）の稲木氏を攻撃した（県北-38・39）。応永29～30年には額田氏や山入佐竹氏らが立て籠もる**額田城**（那珂市：0189）を攻撃した（県北-40・41）。

その後も、永享10～11年（1438～9）に起きた永享の乱の頃までに**国見要害**（常陸太田市：未収録）、**利員城**、**依上城**（大子町：0012）、**野口城**（常陸大宮市：0047）、**小里・羽黒山城**周辺（常陸太田市：0169・0176）、**石神城**（東海村：0302）、**鳥渡呂宇城**（常陸大宮市の金井城？：0120）、**和田城**（常陸太田市：0166）、**長倉城**、**大野城**（大子町。内大野館？：0020）、**谷沢城**（同上：0041）など、県北地域各地の城館が戦場となった（県北-42～55・57・467、県北2-84・85）。

④室町時代末期～戦国時代初頭——佐竹の乱・第二期（義俊・実定兄弟の争いと享徳の乱）

享徳元年（1452）、佐竹実定が**太田城**を奪取し、兄の佐竹氏15代義俊・義治父子を追放した。義俊は一族大山氏を頼って**孫根城**（城里町：0347）に、義治は**那珂柯斧沼の上の要害**（城里町？：未収録）や**大門城**（常陸太田市：0132・0133）に拠ったという（県北2-91・92・96・99）。享徳3年には享徳の乱が起こり、鎌倉府体制が崩壊し、関東は戦国時代に突入した。

古河（鎌倉）公方足利成氏派の義俊・義治父子と室町幕府・関東管領上杉氏派の実定の対立は長期に及んだが、応仁元年（1467）、義俊・義治父子は**太田城**に復帰を果たした。この間、享徳の乱や佐竹の乱に絡んで、**湊城**（ひたちなか市：0334）、**小場城**（常陸大宮市：0057）、**久米城**（常陸太田市：0151。詳細は二章で。）・**小爪城**（同上？：未収録）などが戦場となった（県北-59、県北-464、466、473～476）。

文明17年（1485）には陸奥の岩城氏が常陸国へ侵攻してきた。**車城**（北茨城市：0241）を攻め落として城主車氏は戦死、**龍子山城**（高萩市：0260）の大塚氏を降伏

させたという（県北 2-105。※大塚氏に関しては事実でない可能性がある）。

⑤戦国時代前～中期——佐竹の乱・第三期（佐竹の乱終結）

延徳2年（1490）閏7月、佐竹氏17代義舜が山入佐竹氏によって**太田城**から追放された（県北-61）。一族大山氏を頼って**孫根城**に拠った義舜は、岩城氏、下野国の下那須氏らの後援を得て反撃を開始した。明応元年（1492）、岩城氏は山尾小野崎氏の**山尾城**（日立市：0288）を、下那須氏は長倉氏の**長倉城**を、義舜自身は小貫氏の**部垂城**（常陸大宮市：0056）に入って小場氏の**小場城**を攻撃する手はずを整え、**太田城**の山入佐竹氏や山入佐竹氏に与する一族・国人に圧迫を加えた（県北-62～64）。明応2年の和議を挟んで、義舜は**金砂山城**（西金砂、東金砂両説あり）、**大門城**に拠りながら、文亀2年（1502）または永正元年（1504）に**太田城**を奪回し（県北-69、71、県北 2-244 など）、山入佐竹氏を滅ぼして佐竹の乱を終わらせた。

その後、古河公方家の内乱が起こると、永正13年（1516）6月、足利政氏派の岩城・佐竹連合軍と足利高基派の下野宇都宮氏が下野国縄釣（栃木県那珂川町）で激突し、岩城・佐竹連合軍は敗北した。宇都宮軍は勢いに乗って佐竹領に攻め込み、**月居城**（大子町：0022）あたりまで戦場となった。戦後、義舜は**月居城**に番手を派遣し、宇都宮氏の再来攻に備えた（県北-80～83・85）。

⑥戦国時代中期——佐竹氏享禄・天文の乱

享禄2年（1529）10月、佐竹氏18代義篤の実弟宇留野義元が佐竹氏重臣小貫氏から**部垂城**を攻め取った（県北-89・91）。天文4年（1535）、一族や傘下の江戸、石神小野崎氏らが義篤に反旗を翻し、さらに岩城氏が反義篤方を支援するため常陸へ侵攻した。県北地域では**川崎城**（常陸大宮市：0081）、大窪（日立市）、村松（東海村）などが戦場となった（県北-92・93 など）。天文8年3月には義篤・義元兄弟の対立が勃発、義篤は義元が拠る**部垂城**や**前小屋城**（常陸大宮市：0054）を攻撃した。翌年3月、**部垂城**は落城し、義篤期の一連の争乱は終わった（県北-95～99）。

⑦戦国時代末期——佐竹氏傘下の領主の反抗

佐竹氏が常陸北・中部外へ勢力を拡大すると、常陸北部の争乱自体が減少していったが、傘下領主の反抗がたびたび発生した。天文16～20年（1547～51）の**水戸城主**（水戸市：0396）江戸氏の乱では、同19年に**戸村城**（那珂市：0190）周辺などが戦場となった（県北-109～111）。天正2、5年（1574・77）の車氏の乱（詳細は二章で）、同17年（1589）の額田小野崎氏の乱では、どちらも佐竹氏が本拠の**車城**、**額田城**を攻撃して降伏させた（県北-165、166、168、243～247）。

⑧戦国時代末期～豊臣期——中世の終焉と廃城・廃館

天正18年（1590）7月、豊臣秀吉は佐竹領のうち居城（**太田城**）、**江戸崎**（稲敷市：0834）、**府中**（石岡市：0581）、**滑津**（福島県中島村）の4城以外の破却を指示した（県北-262・263・265）。徹底されたわけではないが、小規模な城館はこのとき廃されたか。同年8月、佐竹氏は秀吉から常陸国の大部分、下野国東部、陸奥国

南部の所領を安堵された。さらに同年 12 月～翌年 2 月にかけて、額田小野崎氏ら傘下領主の一部を滅ぼし、権力基盤を強化した。天正 19 年 3 月には佐竹氏 21 代義宣が居城を水戸に移し、隠居の父義重が再び太田城主となった。慶長 7 年（1602）5 月、長く常陸北部を支配した佐竹氏・岩城氏が転封・改易となり、一部を除く常陸北部の主要城館も間もなく廃城・廃館になったと推測される。

第二章 城館にまつわる従来説の検証

①太田城（常陸太田市：0137）と佐竹義重

従来説：佐竹氏 20 代義重が隠居後「北城」「北城様」と呼ばれたのは、太田城が水戸城から見て北に位置するため（『戦国武将列伝 3』など）。

または、太田城自体が「北城」と呼ばれた（『茨城県の中世城館』など）。

- ・有力領主を居所の地名で呼ぶ慣例

例：佐竹氏→太田、大塚氏→龍子山（立子山、立子）

→義宣が水戸に本拠を移す前から義重は「太田北城」と呼ばれる（史料編① - 1）。

⇒義宣に家督を譲り、太田城内の「北城」（地名としては残らず。「中城」はある。）に移り住んだことが由来か。

※義重弟の小場義宗も隠居後「小場御中城」と呼ばれており、小場城内の「中城」（現在も地名として残る）に移り住んだことが由来と考えられる。

- ・佐竹氏の秋田転封後も「北城」と呼ばれており（県北-391 や秋田藩家蔵文書六）、「北城」というのは太田城そのものではなく、あくまでも義重の呼び名。

②久米城（常陸太田市：0151）と久米城合戦

従来説：文明 5 年（1473）または文明 10 年（1478）に山入佐竹義知が、佐竹氏 16 代義治三男義武が守る久米城を攻撃、義武を戦死（自殺）させる。その後、義治が奪回に動き、義知は戦死した（県北 2-103、県北 2-276 など）。

※『茨城県の中世城館』の久米城の解説は文明 10 年説を採用。

⇔義武は文明 5 年生まれ（兄義舜は 1470 年生まれ）、従来説の段階では幼児。

15 世紀後期頃の久米城主は佐竹氏重臣小貫氏（小野崎氏）？

→久米城合戦は 15 世紀後半だけで少なくとも三度発生

- ・長禄 3 年（1459）～応仁元年（1467）の間：山入佐竹義継（×義知）・下那須持資ら足利成氏派による久米城攻撃（史料② - 1～3）。
- ・延徳 2 年（1490）前後？：山入佐竹義藤が久米城を攻撃（史料② - 4）。
- ・15 世紀末？（明応 2 年以降か）：義武が小貫氏から久米城を奪う（史料② - 5）

⇒佐竹義武が戦死したのは従来よりも後の時代。

→従来説は複数回起きた久米城合戦の内容が合わさって成立した俗説。

合戦の具体的な年代や政治的背景について、今後の考察が俟たれる。

③車城（北茨城市：0241）と好間太郎左衛門（車夕齋）の乱

従来説：天正11年（1583）11月に車城主車氏（好間氏）が佐竹氏に反乱を起こした（『北茨城市史 上巻』『図説茨城の城郭』等）。年代の根拠は同年の安良川八幡宮（高萩市）棟札の「御車領分ハ此時分乱後ニ而上下手つまり」という記載（県北-207）。

→実際は天正2年（1574）と5年（1577）に発生（史料③-1、4）。

- ・天正2年11月、好間太郎左衛門の「逆意連続」により、佐竹義重が車城を攻撃。結果的に車城は破却、太郎左衛門（史料③-1、4では石齋。「車記」は太郎左衛門と夕齋（関齋）を別人とする。）は太田城に抑留された（史料③-1～3）。
- ・同5年8月、太郎左衛門は車城に入って再び反乱、翌月戦死（史料③-4）。こちらも今後の考察が俟たれる。

⇒棟札の記載は、2度の反乱による在地への影響が長引いていることを示すもの。

おわりに～「文献資料一覧」の意義と課題～

★県北地域には佐竹氏関係を中心に、二次史料含め豊富な史料が残存。

不十分ながら、城館関連史料を集成・一覧化したことは大きな意義。

- ・1章：城館を巡る政治史の復元が容易に。

戦場として一次史料に現れるのは有力領主の本拠・交通の要衝に位置する城館が多い。時代によって争点となる城館は異なり、県北地域の多様性が窺える。

- ・2章：従来説の検証が容易に。

新出史料、年代比定や史料解釈の変更等により地域史像が塗り替えられることも。

◆課題：「文献資料一覧」の改良・充実化、城館解説との関係、未比定の城館の存在。

【主要参考文献】

市村高男著『戦争の日本史10 東国の戦国合戦』吉川弘文館、2009年

茨城県教育庁総務企画部文化課編『茨城県の中世城館一茨城県中世城館跡総合調査報告書一』茨城県教育委員会、2023年

茨城県教育庁文化課編『重要遺跡調査報告書II（城館跡）』茨城県教育委員会、1985年

茨城城郭研究会編『図説茨城の城郭 改訂版』国書刊行会、2017年

茨城城郭研究会編『続・図説 茨城の城郭』国書刊行会、2017年

大類伸監修『日本城郭全集3』人物往来社、1967年

黒田基樹編『戦国武将列伝3 関東編 下』戎光祥出版、2023年

佐々木倫朗・千葉篤志編『戦国佐竹氏研究の最前線』山川出版社、2021年

サンケイ新聞社編『茨城の城館 一～四』筑波書林、1981年

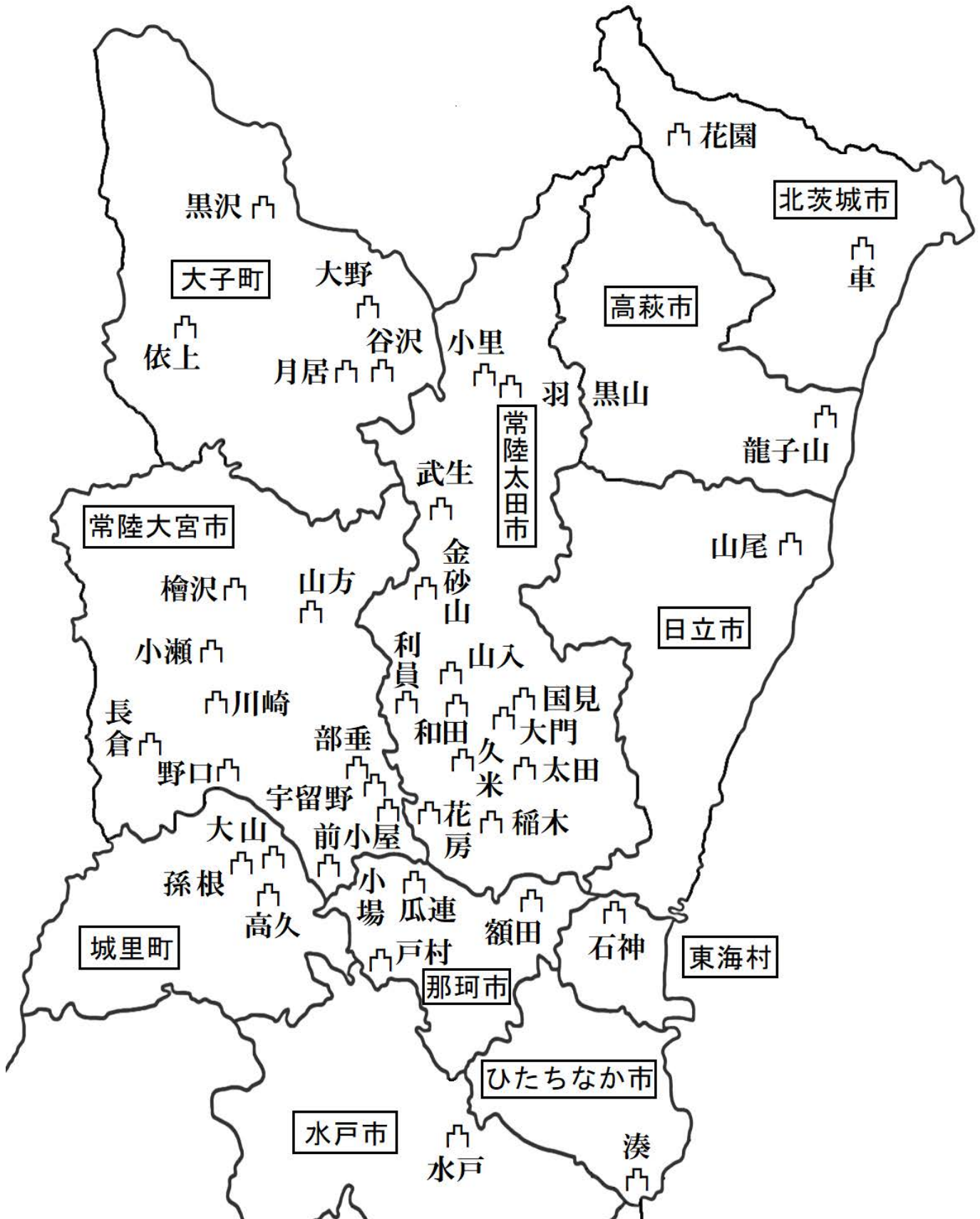
高萩市史編纂専門委員会編『高萩市史 上』高萩市役所、1969年

高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、2017年

平井聖ら編『日本城郭大系 第4巻 茨城・栃木・群馬』新人物往来社、1979年

茨城県北部城館配置図

※一次史料を中心に主要な城館をプロットしたものの。
鳥渡呂宇城など比定地不明の城館は除く。



史料編

①-1 真壁氏幹書状 (県北-267: 千秋文庫所蔵佐竹古文書)

追啓、鹿嶋御神役之間、判形不申候、以上、
急度申入候、抑御上洛以来者、是非不申達候、路次無別義御着
京候哉、乍恐無心元候、内々疾ニも雖可申宣候、定可被及聞召、
四十日余奥州岩城ニ為在番滞留申候き、其上直ニ太田へ罷着、
及廿日致在佐候、然間乍存知遅延罷過候、奥口如思食、館ニ御
帰城候、九月廿八日、岩城実城へ能化丸 (岩城貞隆) 殿御移ニ
候、弥々可御心安候、定 殿下様御前へも節々可御出仕候、万
端有如思召、急速御帰国念願候、如何様追而以代官可申宣候、
委細各々憑入候条、奉省略候、恐々謹言、
(天正十八年) 真壁

拾月十七日 氏幹

太田北城 (佐竹義重)

御宿にて参

※年代比定は佐竹義重の上洛記事など記載内容による。

②-1 山入佐竹義継書状写 (県北-458: 小宅文書)

態々御札先以恐悦之至候、抑那須越後守方 (持資) 被致出陣、
先勢遣候、依此方時間一「宜力」自身可有易「着力」陣候、仍
度々弓箭理運仕候間本望候、雖然敵城通路口、悉依不佣持候、
未落居候、雖然涯分に可致調法候、随御脚氣之由承候、能々御

養生可目出候、諸事期来信候間令省略候、恐々謹言、
(長祿三年) 応仁元年)

十一月一日

上総介義継 (花押影)

「謹上 湊殿 (小田) (花押影)」(ウハ書カ)

②-2 山入佐竹義継書状 (県北-464: 東京大学白川文書)

先度令啓候処、預委細御報候、恐悦之至候、抑向久米・小爪ニ
三ヶ所取陣候処、右馬頭被召同心、取後陣候き、雖然廻計略候
間、敵城致没落候、多年之本望此時候、且者可有御難「推」察
候、仍堺辺之事、種々雜意候処、依無御等閑候、当弓矢悉本意
之分候、是併御芳恩之至、忝次第候、如連々申候、自然之時預
御合力候者、可為恐悦候、年内之事者、無余日、成明春候者被
加御力候者、所仰候、恐々謹言、
(長祿三年) 応仁元年)

十二月一日

上総介義継 (花押)

謹上 白河殿御宿所

※②-1、3の大きな年代比定は②-3の足利成氏の花押
形・書札札と各内容・日付の類似性による。

②-3 足利成氏感状 (県北-466: 栃木県立博物館所蔵那須文書)

「切封墨引」(端裏)
去廿三日於久米、一家被官碎手依励戦功候、小爪責落候之由、
佐竹上総介 (義継) 注進候、誠感思召候、於御恩賞者可依申上

旨候、猶以能々相談候者、可然候、謹言、

(長祿三年(応仁元年)

十二月七日

(花押)

那須越後守殿 (持資)

②・4 山入佐竹義藤判物写 (県北-401:秋田藩家蔵文書八)

今度久米ニおみて合戦ニふるまい候由申候間、神妙候、仍あし間の和久の村之事おんしやういたし候、次大夫屋敷の申され候、心得候、代の地をもつてこんりういたし候へく候、謹言、

二月廿八日

義藤 (花押影)

滑河式部少輔殿

②・5 佐竹譜代記録 (県北-505:秋田県公文書館蔵)

右当方前代之久起如此也、亦御普代之不知処ヲ成調ヲ書次者也、小野崎築前道宝入道之養子也、(佐竹) 義武ニ久米之地ヲ被取申、本所・本領悉離ル、間、厥後者本名小貫築前入道ト書也、当方御普代系図之事、小野崎道宝先祖ヨリ持来ル也事明鏡也 (下略)

※②・5の原形の成立は小野崎(小貫)道宝入道が養子の小野崎(小貫)筑前守に譲渡した十五世紀末と考えられている。

③・1 東州雜記 天正二年条 (県北-168)

(前略) 霜月、車ノ城破却、(車) 石齋ハ太田ノ(後略)

③・2 佐竹義重書状写 (県北-165:秋田藩家蔵文書二〇)

在湯付、為脚力条々預届候、本望候、然者好間太郎左衛門逆意連続之上、直々彼地へ押寄及調義候、然間無程折角悩望最中二候、何篇一兩日之内可為落居候、余事期来音時候、恐々謹言、

(天正二年)

十一月三日

義重

赤坂左馬助殿

※③・2・3の年代比定は③・1による。

③・3 田村顕康書状 (県北-166:千秋文庫所蔵佐竹古文書)

熊令啓達候、抑三箱へ為御湯治御出張之由承及候処ニ、好間方不義之操候哉、就可被加退治、于今御在馬之由承候、忱無济限御陣旁、御大義之至奉存候、裡々如之(此)之儀、迺可申達候、此口堺目事候間、暫時も不得手透候間、乍存遅々無御心許候、其表之様子御床敷計候、恐々謹言

(天正二年)

田村孫三郎

霜月八日

顕康 (花押)

佐竹御陣所江 (佐竹義重)

参

③・4 東州雜記 天正五年条 (県北-177)

車石齋、車へ八月十七日ニ打入、九月朔七頃打死 (後略)

常陸・下野国境の城館群 —佐竹氏・那須氏の攻防—

大田原市産業文化部文化振興課
山川 千博

はじめに

- ◇常陸・下野国境付近の城館群 …従来の地元住民・茨城大学中世史研究会・茨城城郭研究会など調査・活用事例に加え、近年の茨城県中世城館跡総合調査事業・常陸大宮市史編さん事業などによる城館発見例の増加により、個々の城館の縄張り構造や、国境付近の分布状況がより鮮明になってきた。
- これら多くの城館群は、歴史の中にどう位置づければよいか？本報告では、その一端として、常陸大宮市内にある国境付近の城館群を、16世紀前半の佐竹氏による下野国那須地域への進出の動きの中に位置付けて考えたい。

1. 烏山城攻防戦にみる国境付近の城館

(1) 佐竹氏による那須出兵

- ◇16世紀初頭的那須氏(図1)と佐竹氏(図2)
- ・那須氏 …長く上那須家(現大田原市)と下那須家(烏山城)に分かれていたが、永正7年(1510)の古河公方足利政氏・高基父子の抗争と連動し両那須家に対立、11年頃(1514)に上那須家が滅亡。那須資房が那須氏内を統一。烏山城が本拠。
 - ・佐竹氏 …佐竹義舜の代(~1517)。両那須家の争いでは下那須家を支持して上那須方面に出兵。依上保(現大子町)から進軍。
- 那須資房の統一後、次第に佐竹氏と那須氏の戦いは烏山城をめぐる攻防戦に。
- ◇天文8年(1539)、那須政資(父)と高資(子)が対立し、高資が烏山城に拠る。
- 佐竹義篤は、父政資に味方して烏山城攻撃に加わる。
- ・政資派 …佐竹義篤・宇都宮俊綱・壬生綱雄・小田政治ら
 - ・高資派 …小山高朝・結城政勝・芳賀高経・塩谷由綱・皆川成勝・皆川忠宗・白川義綱・岩城重隆ら
- この烏山城攻防戦に、常陸・下野国境付近の城館群が深く関わる。

(2) 烏山城攻防戦と城館群

- ◇合戦の内容【史料1】 …天文8年(1539)9月21日、佐竹・小田・宇都宮氏らが出陣し、翌10月には烏山近くに押し寄せる。
- 那須家中が高資を守り堅く防戦したので、烏山城を落とせず。史料後半から、逆に高資派の小山氏・結城氏が、政資派の宇都宮氏を背後から攻撃する状況。
- この後の烏山を巡る攻防戦の推移は、佐竹氏側の史料により語られる。
- ◇那須高資による反撃【史料2】 …1か月後の天文8年(1539)11月、義篤が「高部」(現常陸大宮市高部)における大縄左京亮の防戦を賞する。
- 高資が烏山防戦の後に反撃し、佐竹氏領に攻め入ったことがわかる。

- ・ 烏山←→高部間における攻防。この時期は、高部城(0072)が対那須氏の前線。
- ◇半年後、佐竹氏側に大きな動き …翌天文9年(1540)4月、義篤が対烏山のための動員をかける【史料3】。
 - ・ 野口・東野・高部・小舟・小瀬・檜沢などの者たちが「番衆」として編成され、対烏山のためにさらに前線(の城や陣)に派遣されようとしている状況。
 - これらの地名にはそれぞれ佐竹氏の拠点的な城があることから、城単位で「衆」が編成されていたと思われる。
 - 高部口に限定されず、南北広域にわたり複数口&大規模な動員が可能になっていると推測され、明らかに半年前とは異なる状況 …この間に何が？
- ◇この時期、佐竹家中では内部抗争「部垂の乱」(佐竹義元の乱)が起きていた。
 - ※部垂の乱 …享禄2年(1529)10月に佐竹義篤の弟義元が小貫氏から部垂城(0056)を奪ったことに始まる、一族や傘下の領主を巻き込んだ大規模な内乱で、断続的に12年間も続いた(佐竹氏享禄・天文の乱とも)。
 - 実は、天文9年は乱の最終段階の時期で、大動員の直前の3月14日には、義篤が部垂城を総攻撃して義元を滅ぼしていた。
 - ・ 乱終結の直後に動員された野口・東野・小瀬・小舟などは、乱の最中には義元派の領域とされていた地(表1・図3)。
 - つまり【史料3】は、「部垂の乱」終結の後に、野口以下の諸城が義篤方として再編された状況を示す。
 - ・ 半年前は諸城が義元の領域だったため高部口に限定されていたが、「部垂の乱」の終結により、わずかひと月で国境付近の各城で義篤方の「番衆」の編成が可能になり、複数口を確保し烏山への道が開ける(図4)。
 - 部垂城への総攻撃が烏山城攻防戦の合間に行われたのは、義篤の対那須氏上で義元が存在が大きな妨げとなっており、その解消が急務だったから？
 - (「部垂の乱」終結の意義 = 佐竹氏内の統一における重要性に加え、下野国進出上の重要性も)

(3) 烏山への進軍ルートと国境の城館群

- ◇以上を踏まえて、乱後の佐竹・那須氏間を結ぶ佐竹氏の軍事ルートを推定(図5)
 - 【史料3】の諸城 + その他の拠点的な城館 + 近年発見した城館。
 - A …太田城→(山方城)→檜沢城→高部城→(河内城・高沢城)→烏山城へ
 - B …太田城→(部垂城)→東野城→小瀬城→小舟城→(大岩城)→烏山城へ
 - C …太田城→(部垂城)→野口城→(長倉城)→烏山城へ
 - ・ さらに、【史料4】では翌5月18日に、那須政資が佐竹義篤に「向田口」への出陣を度々要請し、「この度出番いり番の人しゆ」とともに「茂木之人数も其口より」=茂木氏も動員。
 - D …茂木城→向田(城)→烏山城へ。
 - 佐竹氏はこれら複数口の進軍ルートを確保して、烏山城を目指す。
- ◇その後も戦国期を通して佐竹氏は、対那須氏(烏山城)にこれらのルートを踏襲？
 - ・ 令和4年度までの茨城県城館遺跡総合調査・常陸大宮市史編さん事業で、国境付近に発見した城館の一部は、佐竹氏対那須氏の歴史上に位置づけられる？

→近年、下野国側でも多くの城館遺跡を発見。佐竹氏方の陣城？那須氏側による対佐竹氏のための城？引き続き検討…。

2. 国境付近の動員体制と城館の構造

(1) 【史料3】にみる「衆」の編成・運用

◇「番衆可指越候」…佐竹氏は対那須氏のため、前線の警固に「番衆」を派遣。

※番…城館を管理する際、特定の城主を置かず有期的な番役で行うことがあり、境目の管理を番で行う例が多い。[峰岸・齋藤編 2011年]

・「初番」として、「野口・東野・高部・小舟之者共可遣候」。

・「次番」として、「小瀬・檜沢の可為衆候」。

・「出入」＝出番と入番。派遣は交替制で行われる。

→拠点的な城を単位として「衆」を編成し、交替で動員・運用している状況。

※衆…領主に率いられた一族・郎党のほか、地域の住人を含む集団。[高橋・前川 2008年]

・「何も悉可遣候」「高部・小舟之者一向ふせうの者とも迄」残らず衆に含み動員。

→城を媒介として、地域住民までも動員するシステムが構築されている。

◇では、この動員システムを可能にした、各城の具体的な構造は？

…これらの「衆」が編成された各城の遺構が、いまでも現地に良好に残るので紹介。

(2) 国境付近の城館の構造

◇高部城(館)跡(図6)…常陸大宮市高部。山方・檜沢方面から、鷲子・烏山に抜ける東西道と、依上保(太子)に抜ける南北道がT字に交差する地点。緒川・和田川に囲まれた、標高290mの山頂に位置する山城で、大規模な堀や土塁が残存。

・「部垂の乱」以前にあった佐竹氏100年間の内部抗争「佐竹の乱」で、最終期に山入氏義が奪って籠り滅亡したと伝わる、山入氏終焉の地(「義舜家譜」)。

→佐竹宗家にとっては領内最奥の城として、「部垂の乱」終結までの間、下那須方面への前線基地として活躍。

・城の周辺…城の東側中腹に、「根小屋」(＝根小屋)。城主・家臣団の居住地、軍勢の駐屯地。

・東麓の町場にみえる地名「宿」。

※宿…中世を通じて交通の要地などにできる都市的な場を示す語彙。一般に定期的な「市」に対し常設の町場と考えられ、戦国期には城下としての機能ももつ。[峰岸・齋藤 2011年]

→高部宿…高部城・和田川・緒川に囲まれる構造で、高部城下として【史料3】で動員された「衆」(＝含地域住民)が広く依拠した空間か。

・宿の北側出口に、城下の出入口を連想させる地名「木ノ出」(＝城の出)。

・「木ノ出」と、南側出口の字「沢口」付近で、ともに旧道が曲がり、宿への入り口を守る構造。

・「沢口」の南岸に出城の高部向館(N_o.77)があり、緒川の渡河点を背後から衝く。

→「衆」の滞在地、高部城…城＋根小屋＋宿＋河川＋出城の組み合わせにより国境付近を警固し、日常的に根小屋を媒介に住民(＝衆)の生活の場である「宿」を保護・管理下に置く。

→この構造が、戦時における「衆」の軍事動員を可能にしている。

◇河内館跡(図7 (No.74)) …常陸大宮市鷲子。現鷲子交差点から緒川沿いに烏山・武茂方面に向かう、国道293号沿いの山上に所在。

・高部城よりもさらに国境近くにあり、佐竹氏に仕える領主鷲子江戸氏(水戸城主江戸氏の庶流)の本拠。【史料3】には登場せず。

・「城」の中腹に「柵小屋」(根小屋)、南麓に「宿」、宿を囲む河川、対岸に向館。

→高部城とよく似た空間構成。蛇行する河川、南西に突き出す縄張り(+背後の山上の遺構)、向館(No.79)からの眺望等で、幹線(馬頭街道)に発達した宿を保護する構造。

・宿の支配 …城主が根小屋を介して、街道沿いの町場としての鷲子宿を保護下におき、町場に依存する流通を管理することで、城主の支配を村人に受け入れさせる。[高橋2017]

・国境の常陸国側には、住民の空間=宿(城下)を囲む「小さな惣構」が、衆を編成するための空間構成として普遍的に存在していたか。

Ex) 下檜沢城跡(No.70) …常陸大宮市下檜沢。檜沢氏・小室氏らの城主伝承。山城+館(≒根小屋?) +宿+河川+寺院。

おわりに

◇報告のまとめ

・常陸・下野国境付近に分布する城館群は、歴史的には、佐竹氏による下野国進出の流れの中に位置づくものも多いのでは。とくに天文9年の「部垂の乱」終結を機に、多くの拠点城郭が義篤のもとに再編された可能性を指摘。

・佐竹氏の、国境の城を媒介とする「衆」の動員システムと、それを可能にする城の構造を確認。

◇茨城県中世城館跡総合調査の成果と今後

・茨城県側で多くの埋もれた城館遺跡を発見。→国境付近の分布状況を、当時の政治状況や現在の行政区の枠組みを越えて一体的なものとして捉える必要性。

…相変わらず常陸国側に多く下野国側に少ない分布 →下野国側を調査。

◇城館遺跡の活用事業

・那須烏山市に接する常陸大宮市美和地区で進められる「森と地域の調和を考える会」の取り組み(平成26年~)。

…戦国史を肌で体験できる城館遺跡の活用を、面的に進めている貴重な事例。

主な参考文献

- ・荒川善夫『戦国期北関東の地域権力』岩田書院、1997年
- ・荒川善夫『戦国期東国の権力構造』岩田書院、2002年
- ・荒川善夫・新井敦史・佐々木倫朗編『戦国遺文 下野編 第一巻』東京堂出版、2017年
- ・泉田邦彦「佐竹天文の乱と常陸国衆」(『地方史研究』398、2019年)
- ・茨城県教育庁総務企画部文化課編『茨城県の中世城館-茨城県中世城館跡総合調査報告書-』(茨城県教育委員会、2023年)
- ・茨城城郭研究会編『[改訂版]図説茨城の城郭』(国書刊行会、2017年、初版2006年)
- ・茨城城郭研究会編『続・図説茨城の城郭』(国書刊行会、2017年)
- ・茨城大学中世史研究会編『高部館跡とその周辺現況調査図』(茨城大学五浦美術文化研究所、2009年)
- ・茨城大学中世史研究会・常陸大宮市歴史民俗資料館(大宮館)編『館〈たて〉と宿〈しゅく〉の中世-常陸大宮の城跡とその周辺-』(常陸大宮市、2009年)
- ・江田郁夫「戦国大名那須氏の成立」(江田郁夫・築瀬大輔編『北関東の戦国時代』高志書院、2013年)
- ・佐々木倫朗『戦国期権力佐竹氏の研究』(思文閣出版、2011年)
- ・佐々木倫朗「十六世紀前半の北関東の戦乱と佐竹氏」(江田郁夫・築瀬大輔編『北関東の戦国時代』高志書院、2013年)
- ・重藤智彬「烏山と那須氏」(なすからジオの会プッチェーロ編『なすからガイドブック』那須烏山市教育委員会生涯学習課、2023年)
- ・高橋修・前川辰徳「常陸大宮市の山城跡 調査概報Ⅰ」(『茨城大学中世史研究』5、2008年)
- ・高橋修「土豪の城と「惣構」-河内館跡(常陸大宮市)とその周辺-」(『常総中世史研究』5、2017年)
- ・栃木県教育委員会事務局文化課編『栃木県の中世城館跡』(栃木県教育委員会、1982年)
- ・常陸大宮市史編さん委員会編『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』(常陸大宮市、2023年)
- ・藤井達也「天文期における佐竹義篤の動向-岩城氏・白川氏・那須氏との関係を中心に-」(『茨城史林』42、2018年)
- ・藤井達也「佐竹義舜の依上保・那須出兵と常陸大宮」(『常陸大宮の記録と記憶』6、常陸大宮市文書館、2020年)
- ・前川辰徳「高部城跡とその周辺」(『茨城大学中世史研究』6、2009年)
- ・前川辰徳「佐竹氏と下野の武士」(高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、2017年)
- ・峰岸純夫・齋藤慎一『関東の名城を歩く 北関東編 茨城・栃木・群馬』吉川弘文館、2011年
- ・森木悠介「戦国期佐竹氏の南奥進出」(高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、2017年)
- ・山縣創明「部垂の乱と佐竹氏の自立」(高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、2017年)
- ・山川千博「高部館跡と高部宿」(高橋修編『佐竹一族の中世』高志書院、2017年)
- ・山川千博・須貝慎吾編『美和の中世城郭-河内城・河内城向館・鷺子宿-』(森と地域の調和を考える会、2017年)
- ・山川千博「部垂城の縄張り」と部垂の乱の城郭」(『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』刊行記念シンポジウム「部垂の乱を考える」第Ⅲ部レジュメ、2023年5月13日)

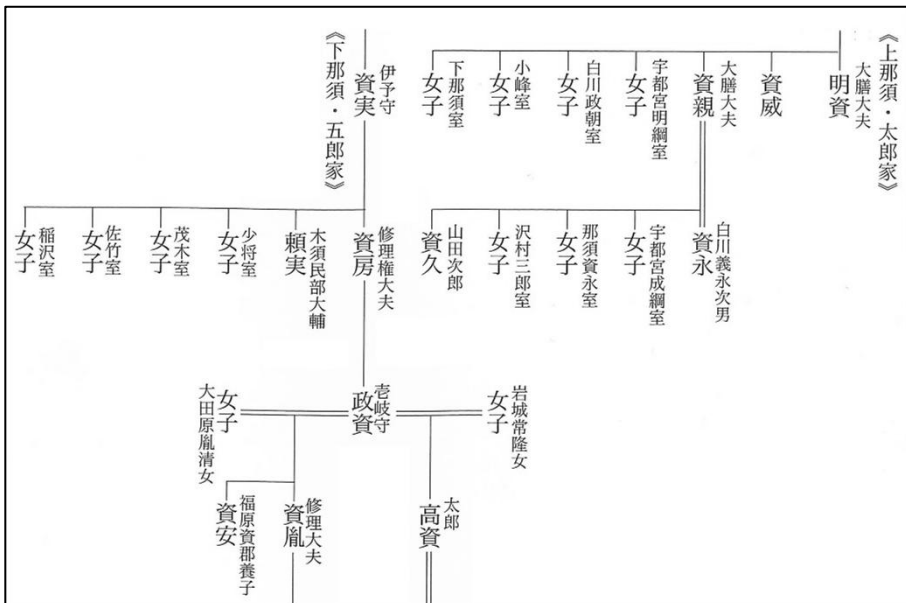


図1 那須氏略系図〔前川辰徳2017年〕より抜粋

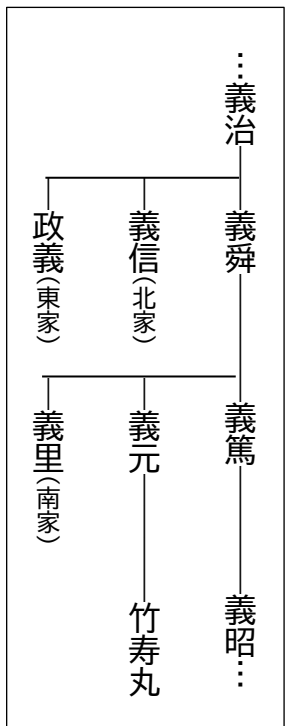


図2 佐竹氏略系図

表1 部垂の乱関連城館

No.	城館名	内容	史料	典拠
56	部垂城跡	享禄2年(1529)10月2日 義元、部垂城を攻め小貴俊通自害。 天文7年(1538)3月22日 部垂の戦いで河井玄番助らが討死。 天文8年(1539)3月 部垂要害攻敵御方打死。 天文9年(1540)3月14日 部垂城落城し義元自害。	東州雑記 義篤家譜 加倉井妙徳寺過去帳 東州雑記	78号 85号 88号 97号
61	(高渡館跡)	部垂城に近接。義篤方に内通した大賀外記の居城と伝わる。	大日本国誌	-
59	(東野城跡)	天文8年(1539)6月 義元、東野のうち10貫文を泉掃部左衛門尉に宛行う。 天文9年(1540)4月25日 乱終結直後に対那須氏の番衆が編成される。	秋田藩家蔵文書6 大縄久照文書	90号 102号
58・63	(岩瀬城or下岩瀬館)	天文4年(1535)カ 小場氏が岩瀬を所務する。	東州雑記	84号
54	前小屋城跡	天文8年(1539)3月 前小屋城落城。	加倉井妙徳寺過去帳	88号
55	宇留野城跡	天文8年(1539)7月7日 北義住、宇留野で討死。	義篤家譜	91号
57	小場城跡	享禄3年(1530) 小場で合戦[和光院過去帳]。 天文8年(1539) 佐竹小場部垂乱 天文9年(1540)3月14日 城主小場義実が自害。	新編常陸国誌 東州雑記 東州雑記	- 95号 97号
62	(石沢館跡)	部垂城に近接。義元家臣と伝わる石沢河内に関連か。	部垂城合戦記	-
60	(小倉城跡)	天文8年(1539)12月 義元、小倉のうち3貫文を泉掃部左衛門尉に宛行う。 義篤方の「小倉台陣」に関連か。	秋田藩家蔵文書6 部垂城合戦記	94号 -
72	(高部城跡)	天文8年(1539)11月22日 大縄左京亮が那須氏から高部(城)を守備する。 天文9年(1540)4月25日 乱終結直後に対那須氏の番衆が編成される。	大縄久照文書 大縄久照文書	93号 102号
70	(下櫛沢城)	天文9年(1540)4月25日 乱終結直後に対那須氏の番衆が編成される。	大縄久照文書	102号
82・85	小瀬館跡or小瀬城跡	天文7年(1538)3月 小瀬(小瀬城?)にて合戦。 天文9年(1540)4月25日 乱終結直後に対那須氏の番衆が編成される。	加倉井妙徳寺過去帳 大縄久照文書	86号 102号
81	川崎城跡	天文4年(1535)10月18日 義篤方、下小瀬の川崎城を攻め落とす。	東州雑記	84号
83	(小舟城跡)	義元方の援軍として戦った内田氏の城主伝承。 天文9年(1540)4月25日 乱終結直後に対那須氏の番衆が編成される。	部垂城合戦記 大縄久照文書	- 102号
47	(野口城跡)	天文3年(1534) 長倉義忠が義篤と対立し野口で自害。 天文9年(1540) 長倉蒼泉寺記録に、城主嫡男直之允義篤に背き野口で自害。 天文9年(1540)4月25日 乱終結直後に対那須氏の番衆が編成される。	新編常陸国誌 水府志料 大縄久照文書	- - 102号
-	(「湯賀之城」)	義元方援軍として小場氏が在陣。所在地不明。	部垂城合戦記	-
-	(「田子内陣」)	義元方援軍として内田氏が在陣。所在地不明。	部垂城合戦記	-

※No. …『茨城県の中世城館-茨城県中世城館跡総合調査報告書-』(茨城県教育委員会、2023年)の城館番号を示した。

※城館名 …二次史料や一次史料を含めた状況証拠などから乱に関わると推測される城館は、()で示した。

※典拠 …『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』第1部第4章の史料番号を示した。



図3 天文9年3月までの状況 [前川 2007年] に加筆



図4 天文9年4月25日以降の状況 [前川 2007年] に加筆

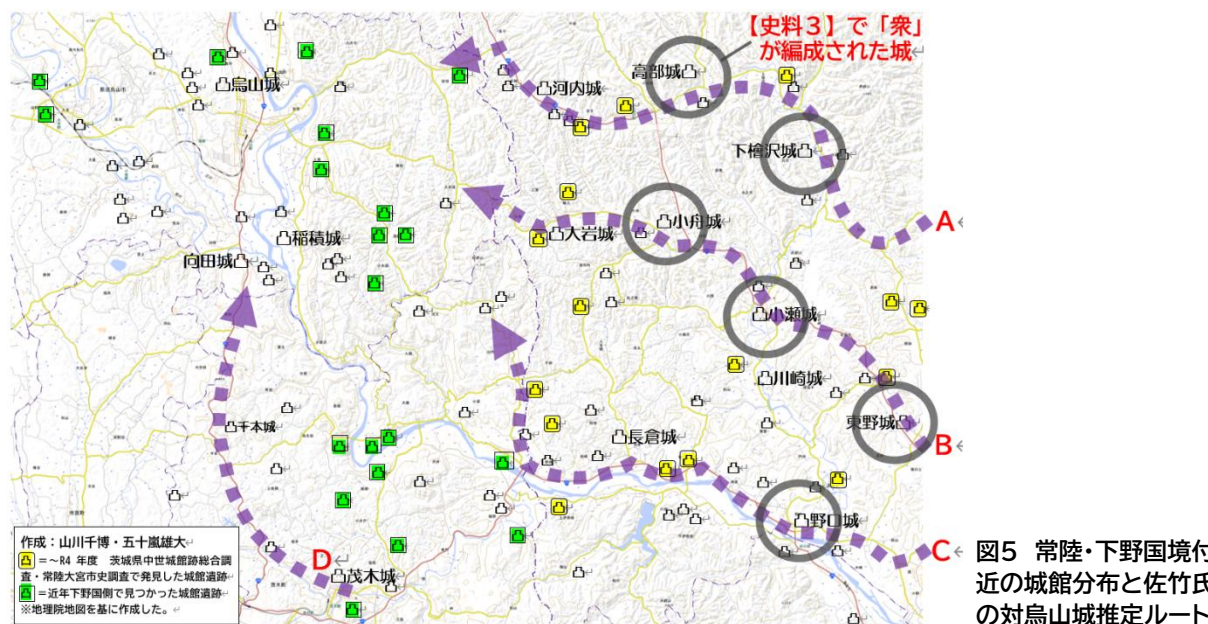


図5 常陸・下野国境付近の城館分布と佐竹氏の対烏山城推定ルート

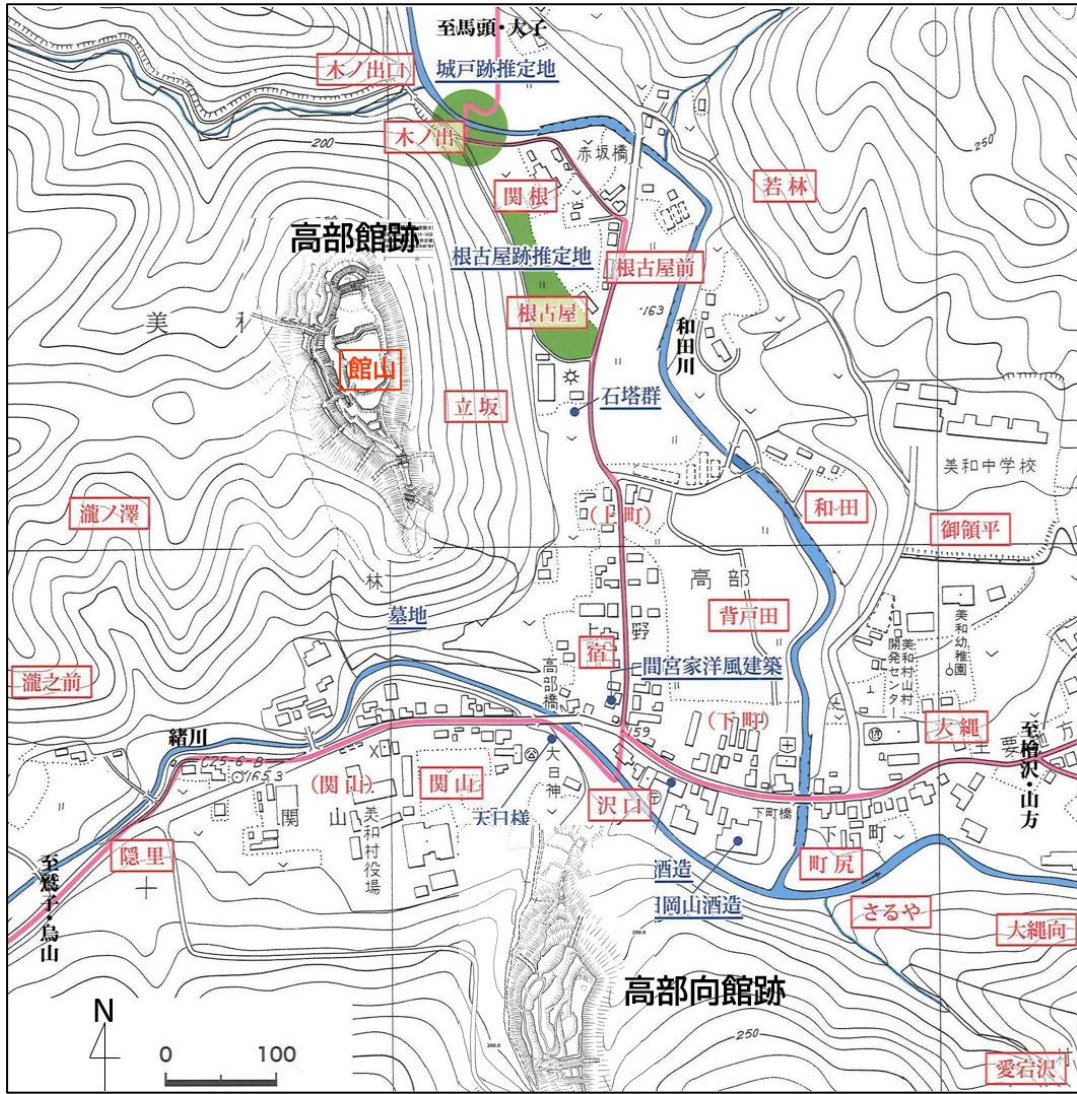


図6 高部館跡とその周辺
〔茨城大学中世史研究会編 2009年〕に加筆／縄張図作成：山川

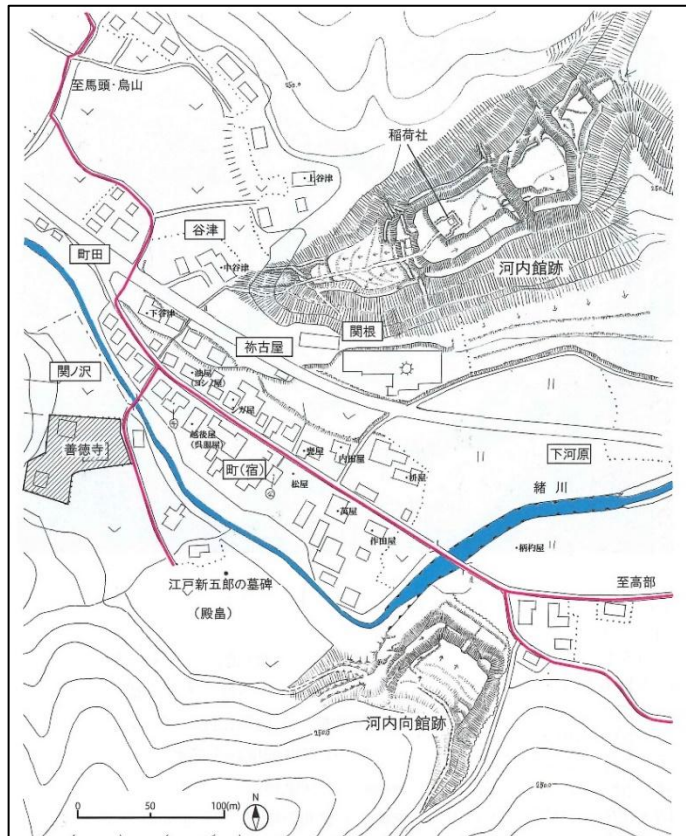


図7 河内館跡と鷺子宿
〔高橋修 2017年〕より／縄張図作成：山川

【史料1】小山高朝書状（早稲田大学白川文書／『戦国遺文』下野編 第一卷『四六一』）

其以往通途不自由仁附而、不能音問候、素意之外候、抑佐竹・小田・宇都宮被談政資、為引汲去月廿一出陣、至于近日者烏山甚近辺へ被押詰候、雖然那須屋裏過半高資相守候故、追日堅固之由其間候、然者別而被相談候条、遠近無其隱候、此砌岩城有調談、被披本意候様、被取成候者可然候、高資へ一旦申合候上、吉凶共彼進退可為同前候、政勝へも始終之義、手堅申閉目候、皆川両人事者不申及候、然而去十八自結城為後詰、宮領蓼沼小屋其外在々所々被打散候、其已後上三川江数ヶ度被及行候、自当口も去十四宮中宿際熱木尽打散候、宇都宮成生城計候上、從其口之御行半延候者、千言万句も不可有其曲候、每事期後音候、恐々謹言、

（天文八年）
十月十八日

（義篤）
白川殿

（小山）
高朝（花押）

【史料2】佐竹義篤書状（大縄久照文書／當陸大宮市史 資料編 2 古代・中世』九三）

鳥（下野國）□□儀□□歟、此般高部□□無二仁相守候、此筋目□後迄も不相替候□□上静謐之上、別可加懇□□可被申付候、恐々謹言、

（天文八年）
霜月廿二日
大縄左京亮殿

（佐竹）
義篤（花押）

【史料3】佐竹義篤書状（大縄久照文書／當陸大宮市史 資料編 2 古代・中世』一〇二）

鳥山へ□□紙申届候、其口之者被申付、為飛脚彼一書今晚烏山へ可被相届候、然者廿九日二番衆可指越候、先初番二八野口・東野・高部・小舟之者共可遣候、催作可然候、出入十一日□□度尤候、野口・東野□□自是可申付候、又次番者小瀬・檜沢の可為衆候、自只今催作尤候、何も悉可遣候、高部・小舟之者一向ふせうの者とも迄、不残可被申付候、御□□二候共、番頭と□□其方被越候者□□可申候、明日・明後日之間被打掃談合可然候、恐々謹言、

（天文九年）
四月廿五日

大縄左京亮殿

（佐竹）
義篤（花押）

【史料4】佐竹義篤書状（大縄久照文書／當陸大宮市史 資料編 2 古代・中世』一〇八）

幸便之間、用一翰候、仍番かハリ明後日廿日さしこすへく候、然者向田口へ一調義有之度よし、政資より度々承候間、この度出番・いり番の人しゆを以可成動候、茂木之人數も其口より同前二可動分二候、猶此間指をき候番衆、定いつれも可罷歸よし可申候、きつく申付られ、一動之間者とめられへく候、留すへさいそくをなし、小荷駄を八つかハすへく候、雖無申迄候、動之義をんみつ専一候、自此方者太山大せん（大膳亮）のすけさしこすへく候、一談合尤候、自何此間のしんらうさつし候、恐々謹言、

（天文九年）
五月十八日

大縄左京亮殿

（佐竹）
義篤（花押）

用水体系と平地城館－那珂市菅谷地区を事例として－

那珂市総務部
藍原 怜

はじめに

那珂市菅谷地区について

- ・久慈川と那珂川に挟まれた那珂台地に位置する那珂市のほぼ中心
- ・慶長 11 年（1606 年）ころには新田開発が始まったとされている
伝承では伊奈忠次が元和年中（1615～1624）に菅谷村に拠点を置き、菅谷村の新田開発を指揮したと伝わる
→近世初頭には新田開発が進み、農村として発展
- ・『水府志料』には棚倉街道の荷物の継立を行う宿場町としての姿も記される
宿が形成された時期は不明だが、『那珂町史』ではこの宿並を「新田開発型の路村」と評しているように、新田開発と時期を同じくしていたのだろう

↓

現代にいたるまで那珂市の中心市街地

→中心地であるがゆえに道路や宅地など開発の影響を非常に受けやすかった
そのため…

- ・遺構の範囲が認識されないまま破壊されてしまった城館も多い
- ・危機感を共有した那珂市教育委員会と茨城大学中世史研究会は、那珂市内の城館の縄張調査を実施→後の茨城県城館跡総合調査にもつながる

…が、近年も開発により遺構は失われ続けている

▼開発前に行うことができた縄張調査によって浮かび上がってきた、菅谷地区に分布する城館の特徴を報告する

1. 那珂市菅谷地区の城館の分布と概要

菅谷地区の城館の特徴＝密集性

- ・一般的に近世村落一村に一つ程度と言われる城館が、菅谷地区（≡近世の菅谷村）に 12 か所も確認できる
- ・12 の城館の概要は以下の通り※城館名に付した数字は調査報告書の通し番号、詳細な分布は配布の茨城県中世城館跡地図を参照

◇堀の内館（0187）

- ・城主は大和田主水正と伝わる
- ・道路敷設や商業施設の建設に伴い遺構の大半は湮滅、堀や土塁が一部残る

- ・発掘調査では堀・土坑・地下式坑・住居跡などの遺構が見つまっている
- ・堀は発掘時の湧水が激しく、水堀としての利用が指摘されている

◇加藤安房館（0188）

- ・城主は加藤安房守と伝わる
- ・堀・土塁ともに残存状況は良好
- ・主郭を中心にその周りに曲輪を配置する輪郭式状の構造
- ・堀を泳いだという地域住民の話や、現在も時期によっては堀に水が溜まっている状況が確認でき、水堀として機能していた可能性がある

◇藤咲丹後館（0194）

- ・城主は藤咲丹後と伝わる
- ・宅地造成により遺構は湮滅している

◇高野氏館（0196）

- ・城主は高野丹後守と伝わる
- ・宅地造成に伴い遺構の大半は湮滅、土塁が一部残存する
- ・発掘調査では堀・掘立柱建物跡・門跡・井戸跡・土坑などの遺構が見つまっている
- ・堀は発掘時に地下水の湧水が激しかったことや、堀底の状況および堆積物などから水堀の可能性が指摘されている

◇宮田掃部助館（0197）

- ・城主は宮田掃部助と伝わる
- ・遺構を良く残す城館だったが、近年の道路敷設や宅地造成によって大部分が失われた
- ・堀幅約8m・深さ約1.2mの堀を含む二重堀を要するなど防御性の高い城館
- ・発掘調査では堀・土塁・土坑および近世・近代の遺構が見つまっている
- ・堀は発掘調査時に地下水の湧水が激しかったことから、水堀としての利用が指摘されている
- ・近世における改修工事の痕跡も見つかっており、近世には水路として利用されていた可能性も指摘されている

◇軍司筑後守館（0198）

- ・城主は軍司筑後守と伝わる
- ・遺構を良く残す城館だったが、宅地造成によってほぼ全域の遺構が失われた
- ・発掘調査では堀・土坑・井戸跡などの遺構が見つまっている
- ・堀は発掘調査時に地下水の湧水が激しかったことから、水堀としての利用が指摘されている
- ・多数見つかった井戸跡は、湧いてしまう地下水の排水溝的な役割があった可能性を指摘されている

◇平野小六館（0199）

- ・城主は平野小六と伝わり、平野館の城主とは同族と考えられる
- ・遺構は湮滅している
- ・川崎春二が残した「常陸奥七郡城館図」に記された地形を一部残すのみ

◇平野館 (0200)

- ・城主は平野氏と伝わる
- ・堀・土塁の残存状況は良好である
- ・現存する遺構から推定して約 250m四方という広大な城域を有している
- ・外堀の最大幅は約 8m あり、防御性も非常に高い城館である

◇仲の房館 (0209)

- ・壬生左近尉正春の屋敷と伝わるが、その後、基本的には寺院境内としての変遷があり、現在は正覚寺の境内となる
- ・堀・溝を一部残す
- ・発掘調査により堀・土塁などの遺構が見つかっている

◇竹の内館 (0210)

- ・城主は藤咲丹後（一の関館の城主の嫡子）と伝わる
- ・宅地造成により遺構は湮滅している

◇柏村越前守館 (0211)

- ・城主は柏村越前守と伝わる
- ・宅地造成により遺構は湮滅している

◇地天館 (0212)

- ・城主は飛田右角通高と伝わる
- ・遺構を良く残す城館だったが、道路敷設や宅地造成により近年急速に遺構が失われている
- ・縄張が不規則で、曲輪の形状もすべて不整形であることが特徴
- ・発掘調査では堀・土塁・土坑などの遺構が見つかっている
- ・遺物が二次被熱を受けたものが多く、戦火を被ったものではないかという指摘がある

これらの城館が南北約 5km、東西約 3km という狭小な範囲に密集している

さらに、宮田掃部助館【図 1】や平野館【図 2】のように巨大な堀などの堅固な防御遺構をともなった城館もある

▼明らかに軍事施設として整備された菅谷地区の城館

これらが密集した意味はどこにあるのだろうか？

2. 境目地域の城

菅谷地区は、戦国領主の「領」の境界が接する、いわゆる「**境目地域**」なのでは？

☞それゆえに軍事施設としての城館が充実

- ・「**領地違乱書付写**※」という史料がある

※15 世紀初頭を発端とし、以後約 100 年間続いた「佐竹の乱（山入の乱）」

によって佐竹領に混乱が広がると、その期に乗じて、水戸に本拠を構えた

江戸氏や那珂市額田を本拠とした額田小野崎氏などが佐竹氏の領地を押領した。この史料はそのときに押領された領地の目録で、佐竹氏と山入氏との和議を仲介した岩城氏の家臣岡本竹隠軒妙誉（のちに佐竹氏に仕える）が乱後処理のために書き上げたもの。

- ・菅谷に隣接する地では、福田を江戸氏が、杉を額田小野崎氏が押領
→菅谷は那珂地域におけるまさに領地の取り合いの最前線ともいえる地
- ・これ以後、佐竹氏・江戸氏・額田小野崎氏は境界となる地を競合する関係となり、江戸氏・額田小野崎氏は表面的には佐竹氏に属しながらも、緊張関係に
→このような緊張関係が江戸氏による菅谷の軍事的強化を進めさせたか
→宮田掃部助館や平野館の防御施設が北側に向けて強固に造られているのは北・北東の佐竹氏や額田小野崎氏を意識していると考えられる

このとき、新たに臣下を置いて城を作らせるのではなく、既存の土豪たちを取り込み、その居館をより防御性の高い城館に改修し所領を守らせたとみられる

その様子として…

『水府系纂』地天館城主飛田氏

「江戸但馬守重通ニ仕エ、知行若干領ス、平野将監・飛田若狭・高野丹後・軍司主水・藤佐久織部・大和田某・榎村某・海野某・平野某等ト共ニ佐竹領・額田領トノ境目ヲ守ル事役ス、依テ菅谷十騎ト称セラル其一員ナリ」

海野某を除けば、皆菅谷地区の城主として伝わる土豪たち

→菅谷地区の土豪たちが、江戸氏の戦力として、対佐竹氏・額田小野崎氏との境目を守る役割を担っていたことが分かる

◎菅谷地区は佐竹氏領、額田小野崎氏領、江戸氏領が接する「境目地域」

- ・防衛のため、菅谷地区は領主である江戸氏によって既存の土豪たちの居館が要塞化された→軍事施設としての城館が充実
- ・土豪たちは「菅谷十騎」と伝わるように連携する関係にあった

▼そもそも土豪たちはなぜ菅谷に集まっていたのか？

3. 用水体系と城館

土豪たちが菅谷に集住した理由を用水に求める

- ・近世の菅谷村を描いた「菅谷村全図」をもとに用水体系を示してみると
→各城館が用水路によって結びついていることが分かる

この用水路はどのように形成されたか？

○水の供給源

- ・那珂台地は久慈川・那珂川両河川の沿岸部以外は水源の確保に苦慮する
→古代以来、那珂台地の主要な集落は久慈川・那珂川両河川の恩恵を受けられる沿岸部に集中していた
- ・菅谷地区のある台地中心部は水の供給を河川に頼ることができなかったが…
→菅谷地区は各地に広がる山林によって水分が貯えられる
→この山林によってもたらされる水（主には地下水※）を溜め、灌漑し、水田を拡げていったと考えられる
（※加藤安房館の周辺では現在も地下水をくみ上げるポンプ小屋を数多く目にすることができる）

○土壌の性質

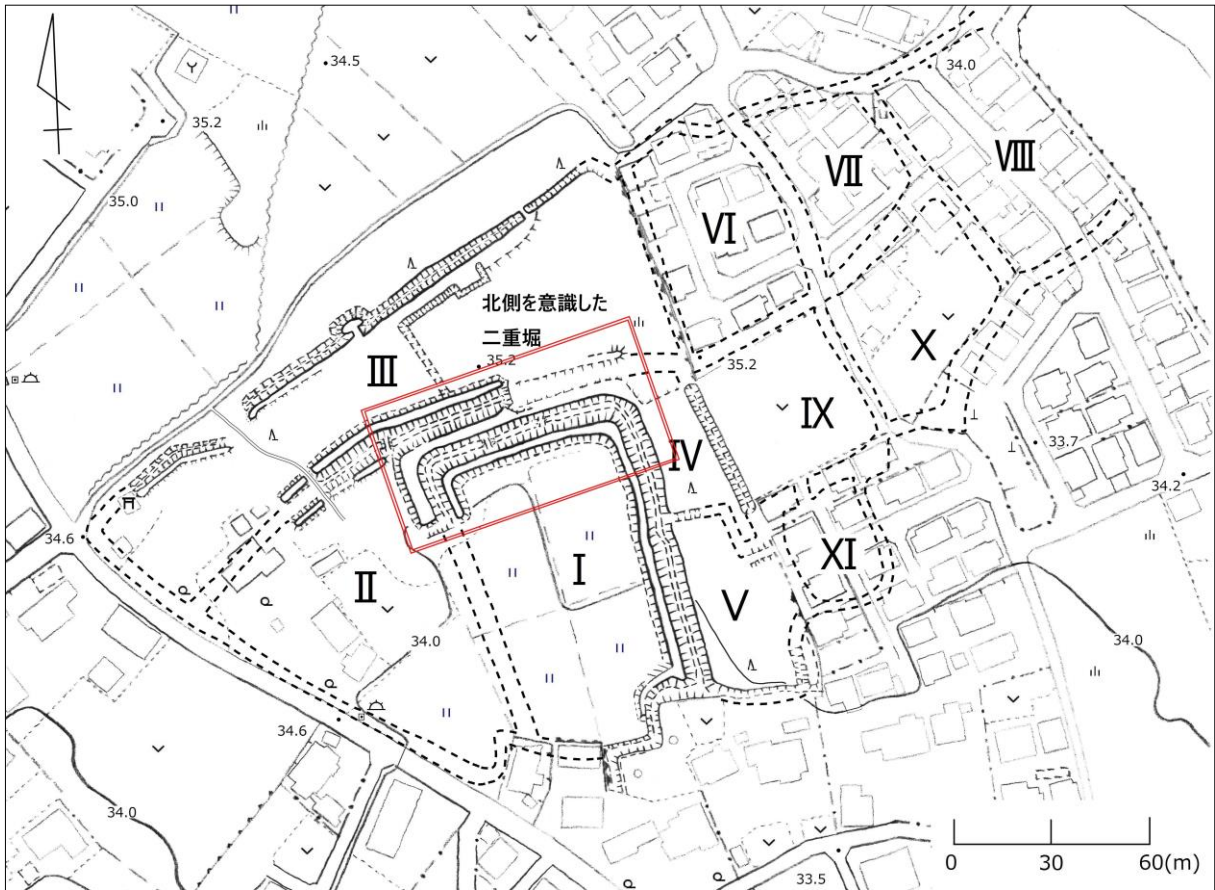
- ・発掘された城館の堀の土質は、粘性が高い土が多くみられる
粘性が高い土は保水性が高く排水性が低い、これが水を貯えるのには適していたのではないか
→菅谷各地に貯水力の高い地点が存在
→中世にそれらの地点を掌握する有力者（土豪）が出現し、居館※を構え、用水を水堀として引き込むなどして管理
→水田開発を行った
※近世になって干ばつ対策として溜池の増設がされることになるが、城館の跡に造られているものもあり、城館所在地が中世時点でも水源であった可能性を物語っている

しかし、地下水を個々に貯水するだけでは安定した水量を確保することは困難
→貯水地点を經由・加水しながら水量を安定させる用水体系を菅谷全体に広げ、生産性を向上させようとしたか
→もともとは貯水地点を各々管理していた菅谷各地の土豪たちが用水体系によって結ばれた
→のちの「菅谷十騎」と伝わるような土豪同士の連携につながる

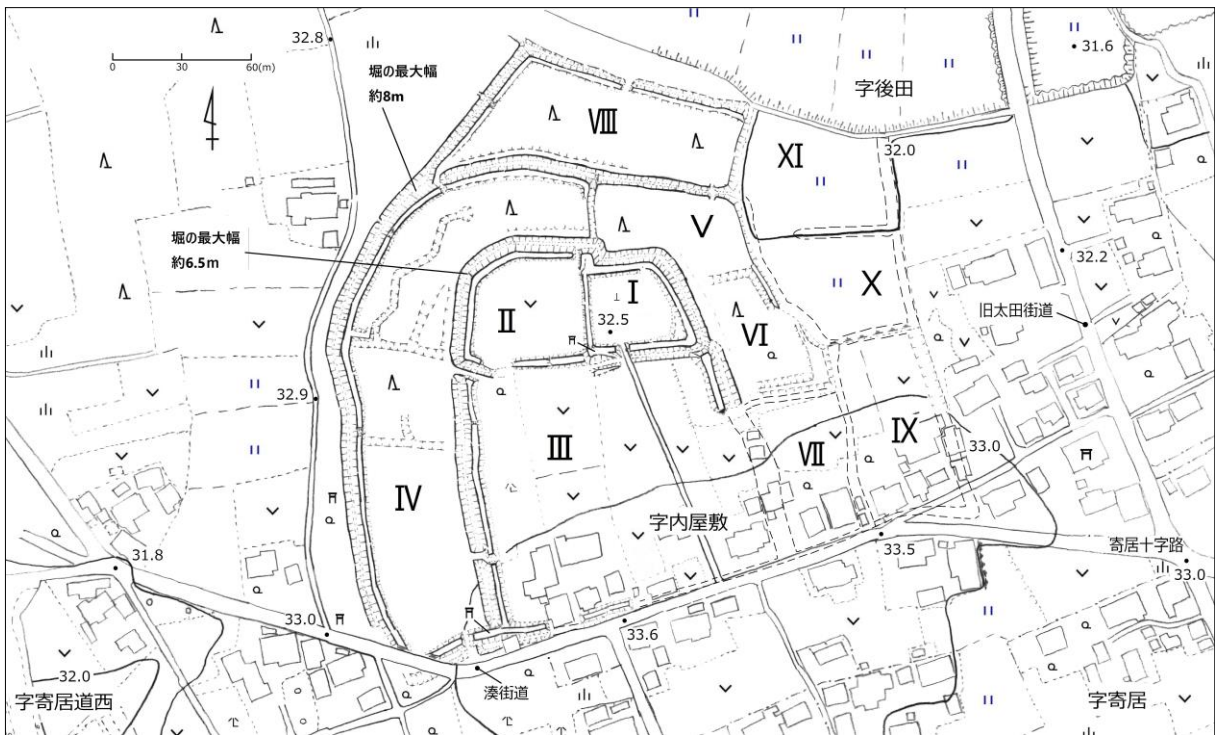
まとめ

菅谷地区の城館群構築の二段階

- ①水田の用水確保に象徴される、特徴的な生産構造が、多数の領主的存在の叢生を生む（生産を支える城館のネットワーク）
↓
- ②戦国期には、「領」の境界を接する戦国期領主の緊張関係→「境目地域」
既存の領主・土豪らの城館が要塞化（地域防衛のための城館のネットワーク）



【図1】宮田掃部助館縄張図（作図：藍原怜、原図：山川千博）
 『常総中世史研究 第3号』掲載の「高内館縄張図」を一部加筆修正



【図2】平野館縄張図（作図：市川大暉、原図：山川千博）
 『常総中世史研究 第3号』掲載の「寄居館縄張図」を一部加筆修正

主要参考文献

- ・泉田邦彦「戦国期常陸江戸氏の領域支配とその構造」(『常総中世史研究』第七号、2019年)
- ・茨城大学中世史研究会「那珂市中世城郭遺跡分布・縄張調査報告(一)～(五)」(『常総中世史研究』第3号～第7号、2015年～2019年)
- ・茨城城郭研究会編『図説茨城の城郭 改訂版』(国書刊行会、2017年)
- ・茨城城郭研究会編『図説茨城の城郭 続』(国書刊行会、2017年)
- ・小山靖憲「東国における領主制と村落」(小山靖憲『中世村落と荘園絵図』東京大学出版会、1987年、初出1966年)
- ・小山靖憲「鎌倉時代の東国農村と在地領主制」(小山靖憲『中世村落と荘園絵図』東京大学出版会、1987年、初出1968年)
- ・佐野静代「平野部における中世居館と灌漑水利－在地領主と中世村落－」(『人文地理』第51巻第4号、1999年)
- ・高橋修「土豪の城と「惣構」－河内館跡(常陸大宮市)とその周辺－」(『常総中世史研究』第5号、2017年)
- ・高橋裕文「那珂市菅谷地区中世城郭遺跡関連資料」(『常総中世史研究』第3号、2015年)
- ・橋口定志「中世東国の居館とその周辺」(『日本史研究』330号、1990年)
- ・橋口定志「方形館はいかに成立するのか」(峰岸純夫編『争点日本の歴史4 中世編』新人物往来社、1991年)
- ・橋口定志「東国の武士居館－中世前期から中世後期へ」(埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』高志書院、2005年)
- ・原田信男「中世の城館－支配の拠点－」(『中世村落の景観と生活』思文閣出版、1999年)
- ・那珂町史編さん委員会編『那珂町史 自然環境・原始古代編』(那珂町、1988年)
- ・那珂町史編さん委員会編『那珂町史 中世・近世編』(那珂町、1990年)
- ・那珂町史編さん委員会編『那珂町の近世村絵図』(那珂町教育委員会、2002年)
- ・株式会社日本窯業史研究所編『宮田掃部助館跡』(那珂市教育委員会、2018年)
- ・株式会社日本窯業史研究所編『宮田掃部助館跡Ⅱ』(那珂市教育委員会、2022年)
- ・株式会社日本窯業史研究所編『地天館跡』(那珂市教育委員会、2015年)
- ・茂木雅博編『常陸堀之内館跡』(国道三四九号線発掘調査会、1976年)
- ・株式会社日本窯業史研究所編『堀の内館跡Ⅱ』(那珂市教育委員会、2017年)
- ・有限会社日考研茨城編『高野氏館跡』(那珂市教育委員会、2008年)
- ・有限会社日考研茨城編『軍司筑後守館跡』(那珂市教育委員会、2009年)
- ・有限会社日考研茨城編『軍司筑後守館跡第2次調査』(那珂市教育委員会、2015年)

まだまだあった！多賀郡の城館

茨城城郭研究会 青木義一・五十嵐雄大

1. はじめに

- 多賀郡の城館はコロナ禍のため、調査が間に合わず『茨城県の中世城館』（以下、「報告書」と略す）に縄張図を掲載できなかった城館や、報告書の刊行後に新たに発見された城館を「まだまだあった！多賀郡の城郭」として報告する。
- 多賀郡とは現在の日立市、高萩市及び北茨城市一帯を指す古代からの総称。多珂郡と表記されることも。中世、多珂荘として立荘されていた可能性がある。
- 多賀郡の戦国領主は大塚氏と車氏。両者の研究は進んでいない。（山尾小野崎氏は、戦国時代には佐竹氏の一族になり、佐竹領に包摂されるので割愛）。近年の成果としては、朝香神社棟札から大塚氏の動向をまとめた中根正人（2019）があるだけとなっている。



多賀郡の城館跡や領主を研究調査することで、中世常陸の戦国史研究の進展に寄与する。

① 車氏

多賀郡車村（北茨城市車）を本貫地とした領主。室町時代には岩崎氏の一族が入り、佐竹氏に従っていた。文明 17 年（1485）に岩城氏の侵攻で岩崎氏系の車氏が滅亡する。代わって入った岩城氏一族の好間氏が車氏を名乗っていく。戦国時代には、はじめは岩城氏側だったが、佐竹氏の勢力が増すと佐竹氏に従うようになる。

② 大塚氏

多賀郡大塚郷菅股城（0247・北茨城市磯原町大塚）を本貫地としていた藤原氏を称する領主。室町時代に小野崎氏から養子を貰い佐竹氏に従っていた。応永 23 年（1416）以降は龍子山（高萩市）に拠点を移す。文明 17 年、岩城氏の侵攻で岩城氏に従うが、佐竹氏の勢力が増すと佐竹氏に従うようになる。系譜は、パワーポイントを参照のこと。

2. 北茨城市車氏の関連城館

○車城（0241）

根小屋川とその支流の沢に挟まれた標高 63m の丘上に築かれた段郭式城館。車氏の本拠と伝えられている。

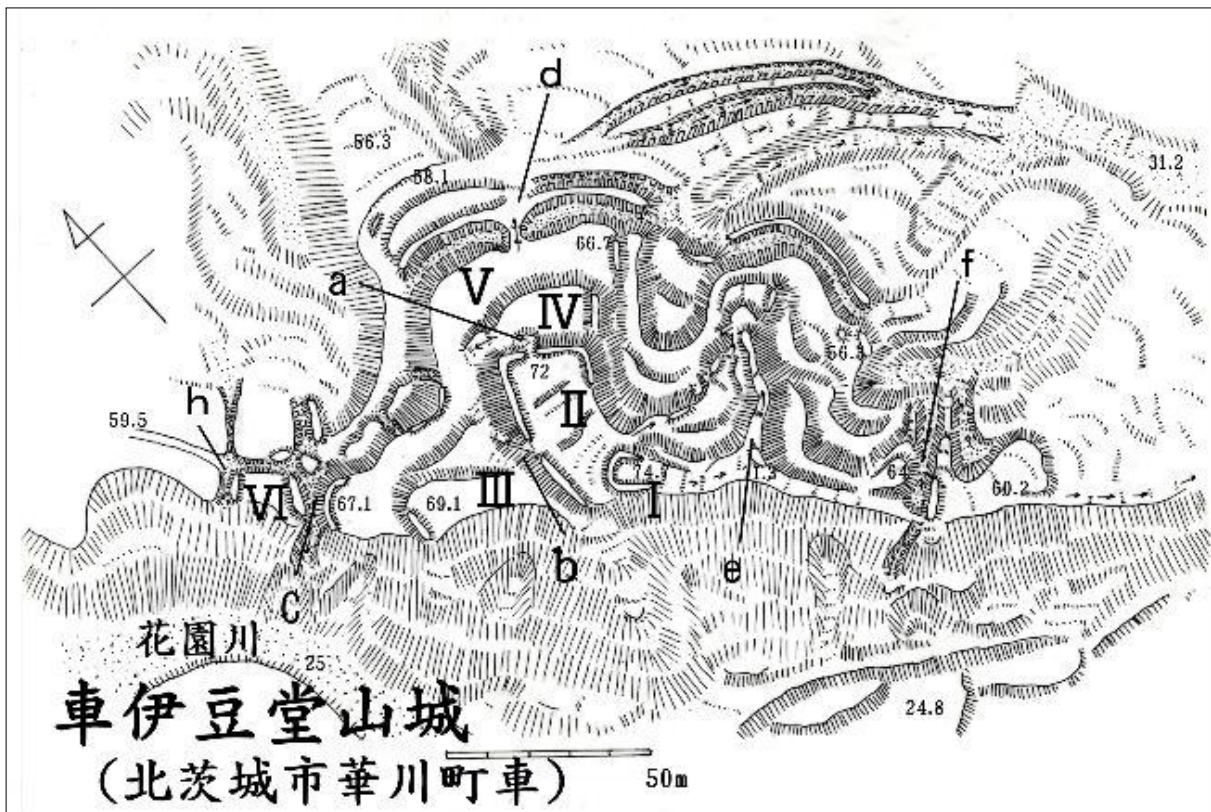
○車伊豆堂山城（0254）・・・報告書にギリギリで縄張図の掲載が間に合った城

★ 立地・規模

花園川と根小屋川に挟まれた標高 40m 程の台地上に高さ 15m 以上の土塁と切岸、深さ最大 8m 幅 10m 以上の横堀が最大四重に巡っている。⇒戦国時代後期の城館遺跡の可能性が高い。

★ 構造

東側から敵軍が攻めてきた場合は、Ⅶを突破しても自然の谷を生かした堀gとfで防衛し、北側の虎口dへ誘導させる。dからⅤを経てⅣ、aの門馬出し虎口かbの坂虎口に取りつかせる。ここを突破され、Ⅱに侵入されても高切岸eに拒まれ、Ⅰには到達できない。西側からは、堀切hや横堀（堀底道カ）cで防衛する。仮にⅥを突破されても横堀cからⅤやⅢで迎撃し、

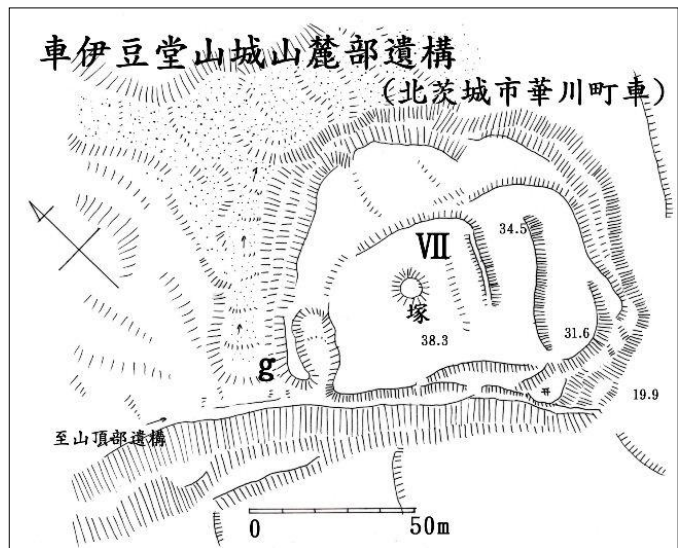


虎口d、a、bに誘導する技巧的な戦術が見て取れる。一方で北側の尾根には普請の形跡がなく工事を中断したような印象。

★ 伝承

「車記」に永正、大永期に車夕齋が「出堂」(伊豆堂)に新城を構えた。その際、住民から不評を買い、落書きをされたため、夕齋は築城をあきらめたと伝えられている。⇒北側の未普請の部分を目指すものか？長久保赤水「他領下相田村中妻村水戸御領豊田村水論所図」に「出堂山 関斎隠居城跡」を描いている。⇒長久保赤水が描く「出堂山」は、山麓のVII部分。背後の山城部分(I～VI)が新城と考える。

⇒構造や伝承から戦国後期に車氏が普請したと考える。目的は車城の詰め城あるいは新たな本拠を模索か。未整備な部分があるので、何らかの理由で普請を中止したと思われる。



◆ 白場下ノ内城(0255)・・・報告書の一覧表に記載

南北朝時代の領主白庭(場)氏の城館跡と伝わる。大規模な二重堀切が二か所残り、戦国期も使っていた模様。城の東にある八幡神社は、戦死した車義秀(好間太郎左衛門尉)の霊を祀る。また、城の南東にある堀ノ内には、江戸時代に建てられた車義秀の墓が残る。

◆ 内城(報告書に記載なし)

「車記」に車義秀の隠居所が字樋ノ口(内城のすぐ側)にあったと伝えられ、その近在地にある城館地名。標高70mの台地上にある。未調査。



◆ 豊田鹿島城(0256)・・・報告書の一覧表に記載

鹿島神社の背後の山にあり、曲輪、横堀が残る。神社の伝承によると、車と佐竹の戦いの時の陣所跡と伝えられている。

○小括

★花園川沿いに 500m～1 kmにかけて城館が密集していた。車氏のすぐ南が大塚氏領(洞)であるため、岩城領の南端を守る防衛網として機能。

★城館の配置から(トガミ=下相田)という町場を囲んでいたことが伺える。トガミ=(礪上・砥上)は、貞治 5 年(1366)二月十日の「奥郡役夫工米切手在所注文」に「多珂庄下礪上 十一町」とあり、切手分(伊勢神宮造営費に充てる役夫工米の徴収対象となる郷)として常陸大掾氏や税所氏らの国衙機構に把握されていた。そこに車氏が城館を築き寺社縁起に勧請が残っていることは、車氏が政治的にこの地域を掌握しようとする意思が伺える。

3. 高萩市龍子山城の近隣で新たに発見された城館

高萩市域の城館はほぼ「龍子山城」1 強。高萩の中世以降の歴史は龍子山城を中心に展開する。本発表で紹介する城館もいずれも龍子山城に関わる。

まずは、龍子山城のおさらいを。

○龍子山城(0260)とは

近世末期まで使われた県内有数の歴史を持つ城。築城時期は不詳であるが、里見氏が平岡氏の可能性が想定される。両氏は応永 23 年(1416)の上杉禅秀の乱で勢力を失い、代わって勢力を拡大した大塚氏が菅股城(北茨城市中郷石岡)から本拠を移す。文明 17 年(1485)頃から山入の乱で佐竹氏の勢力が減退した隙を突き、岩城氏の侵攻が開始され、大塚氏はその傘下となる。佐竹氏が勢力を盛り返すと、佐竹氏に従うようになり、家臣化する。慶長元年(1596)大塚氏に代わり梶原氏が城主になるが、関ヶ原の合戦後、佐竹氏が秋田に移封されると、戸沢盛政が入る。戸沢氏は城下を整備し、松岡城と改称するが、元和 8 年(1622)出羽に移封される。その後は水戸藩領となり家老の中山氏が入る。明治元年(1868)



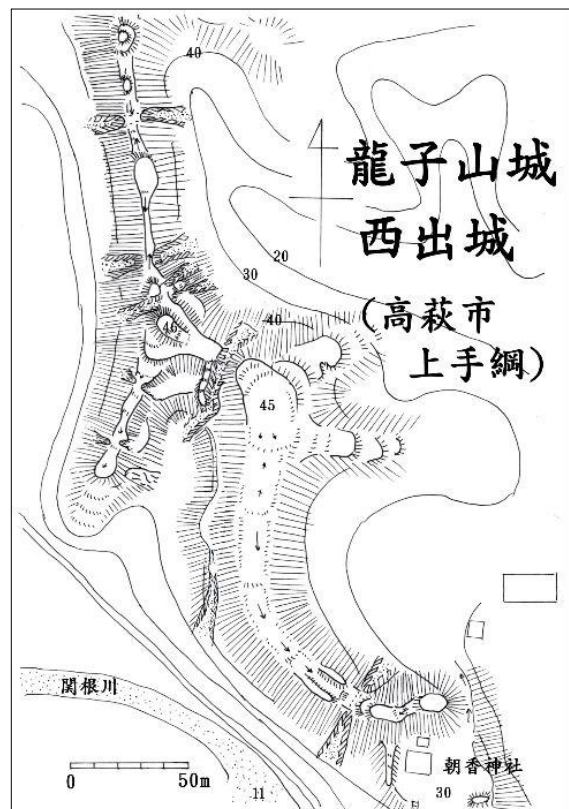
には松岡藩として独立するが 3 年後、廃藩置県となる。中世の龍子山城は、現在、残る姿と大きく異なる。

近世の龍子山城(近世の松岡城)・・・南側が大手、山城部分は武器庫程度にしか使われない。松岡小学校付近が城の中心。

中世の龍子山城・・・松岡小学校付近は関根川の氾濫原、湿地または水田。北側が大手、北の丘の「上宿」(わじゅく)地区が根小屋であり、城砦集落。東端に土塁が現存し、土塁を持つ「弾正屋敷」がある。北には「城戸場」という地名が残る。「上宿」から龍子山城に回廊状に掘、土塁が通じる。

○龍子山城周辺の城館

文化 7 年(1810)寺門忠太夫編纂の松岡地理誌に縄張図付きで 25 城が掲載される。県内最古級の縄張図集であり、本書の存在により多賀郡の城館調査は効率的に進められた。そのうち約 20 城が中世の龍子山城の支城等大塚氏に関連する城館であるが、いずれも規模は小さい。これがこの地方の城館の全てと考えられたが、やはりまだ城館は埋もれていた。こ



これらの城館は松岡地理誌編纂時の江戸時代末期には既に伝承が途絶えていたと思われる。以下、最近、龍子山城周辺で新たに発見された城館(いずれも報告書に未掲載)を紹介。

◆ 龍子山城西出城 (2023 月 12 月発見)

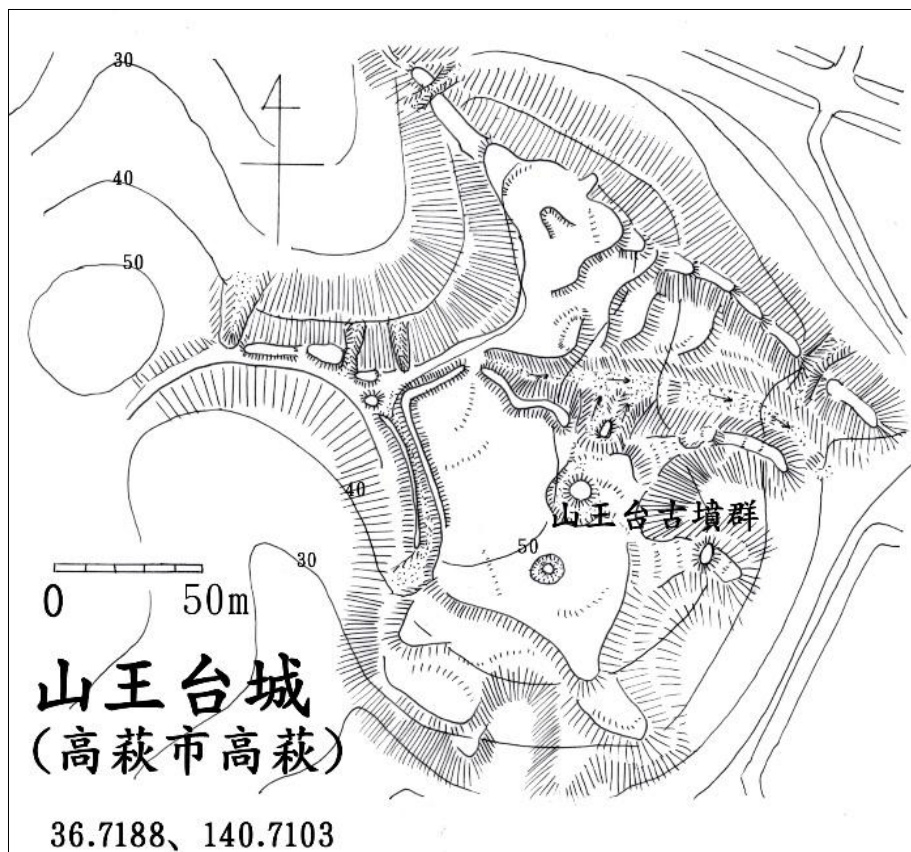
龍子山城の南西約 600mに位置する朝香神社とその西側一帯が城域、標高 46m、比高 35mの山にある。関根川を天然の水堀とした長城という印象、龍子山城の西の大手口であったと思われる。

◆ 能仁寺 (2023 年 3 月発見)

西出城の南にある標高 54m、比高 40mの独立丘にある。ここは朝香神社の旧地でもあり、修験の道場、武装寺社でもあった。簡単な城郭構造を持ち、丘上の尾根部数か所に堀切がある。大塚氏と提携した修験者の城でもあったと思われる。

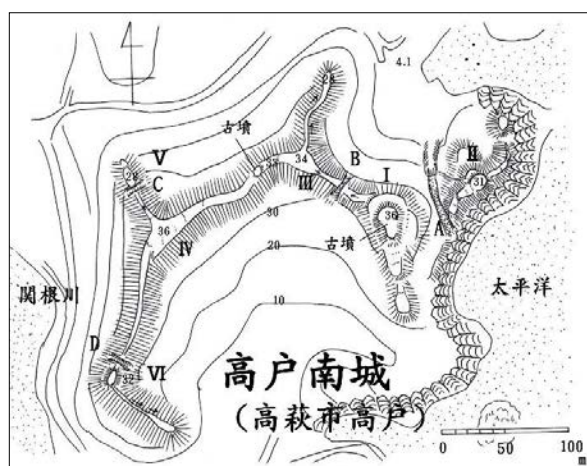
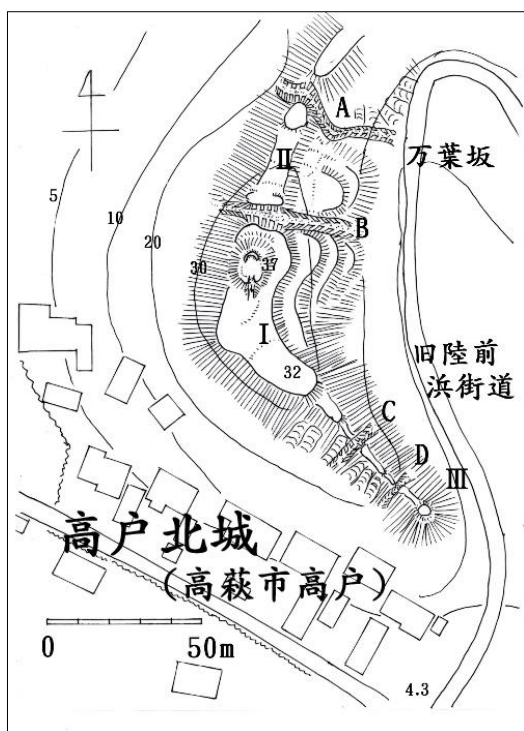
◆ 山王台城 (2023 年 12 月発見)

高萩市役所の北の標高 50mの山にある。山続きの西側に横堀、堀切を置く。内部は不整地で山王台古墳がある。未完成または臨時の城館と思われる。北方向を見ている。北には大塚氏側のリュウガイ古館があり、永禄 11 年(1568)？大塚氏の龍子山城を攻めた佐竹氏重臣、小野崎氏の陣城か？



◆ 高戸北城、南城 (2023年3月発見)

北城、南城の2城から成り、関根川の河口近くの標高約35mの2つの丘にある。「北城」、「西城」の地名が残る。中世の太平洋沿岸航路の港があり、それを管理する城館であろう。港は北城地区にあったと思われる。地区内に修験に関わる「かん止神社」があり、管理者の落合氏が高戸城や港を管理していた可能性がある。北城からは龍子山城が見え、連絡を取っていたものと思われる。北城からは海が見えないため、海方面の物見として高戸南城が、南東の独立丘「離山」にある。北の大津港にも三峰館が発見された。港に付属する城と大津—高戸—会瀬—桜川河口部(要害城)—久慈—那珂湊を結ぶ中世の太平洋沿岸航路の存在が想定される。

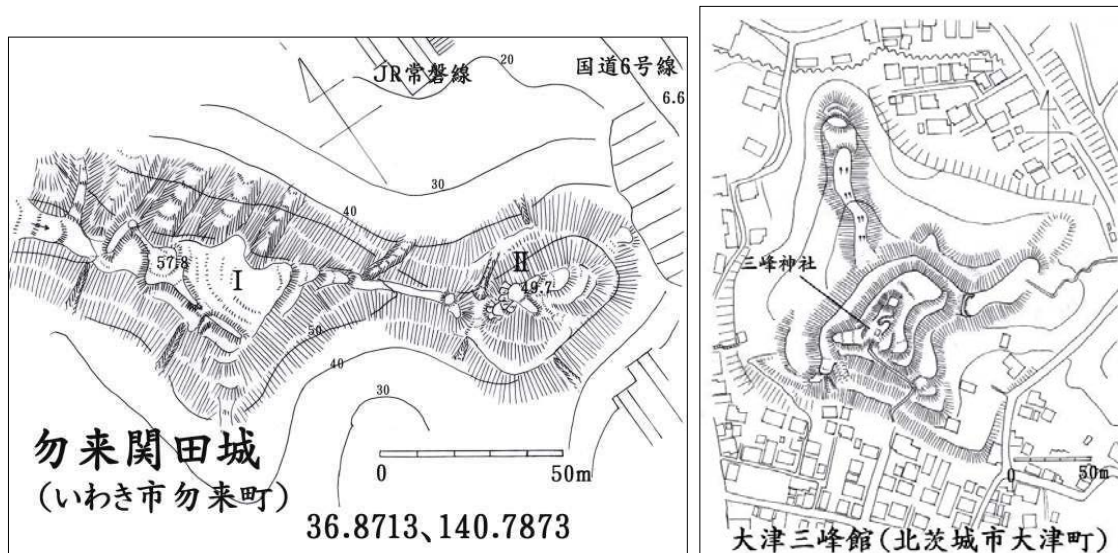


○小括

- ★大塚氏は、龍子山城を中心とした濃密な城館ネットワークで支配地の統治と防衛を図る体制を構築していたことが知られている。これに加え、龍子山城の直近に西出城や丸山砦が、北の上宿地区にも城郭遺構が、城の東にも城郭遺構の一部が発見されている。本城も今まで知られていた以上の厳重な防衛体制を持っていることが明らかになった。
- ★大塚氏も多くの国人領主同様、寺社と連携し、寺社の軍事力も地域支配、防衛体制に組み込んでいたようである。
- ★大塚氏の経済活動については不明な点が多いが、海運もその一端を担っていたようである。
- ★島名城(0269)、山小屋城(0270)に大塚氏と小野崎氏との抗争の伝承が残るが、山王台城の発見により、その伝承が事実として裏付けられるだろう。巨大勢力の圧迫に苦慮する国人領主の姿が見えてくる。

4. まとめ

- これまで車氏の城館は車城程度しか知られていなかったが、車氏にも大塚氏や他の常陸の戦国領主である江戸氏、大塚氏等同様、支城群を持つ城館ネットワークが存在していた。本拠だけでなく、周辺城館、社寺、町場も地域支配の重要な要素であろう。
- この地域の城館の特徴として、高切岸を主体に防御する構造が挙げられる。岩城氏系の城館(大館、白土城等)と似ており、東北地方の城館の影響を受けているのであろう。また、石材が豊富な山に築かれた関本中栗野城(0259)でも石垣、石塁等は築かれていない。常陸周辺の多くの城館同様、多賀郡においても石垣を造る築城文化は見られない。
- 佐竹氏重臣、小野崎氏の大塚氏攻撃が史料に残るが、その裏付けになると思われる山王台城が発見された。また、車伊豆堂山城、臼場下ノ内城、高戸城のように赤色立体図から埋もれていた城が発見された。赤色立体図を詳細に調べるとより多くの山城が見つかるであろう。
- 関根川河口の高戸に港を伴う城館が発見され、里根川河口にある大津港の北の山に大津三峰館が、さらに福島県いわき市勿来の海岸部に勿来関田城が新たに発見された。戦国期の太平洋沿岸航路と物流の研究が待たれる。



まだまだ、多賀郡には城と中世の謎は埋もれているぞ！

参考文献

- 『北茨城市史』北茨城市史編さん委員会 1987
- 『高萩市史』高萩市史編纂専門委員会 編 国書刊行会 1981
- 「松岡地理誌 村明細帳」『北茨城市史 別巻 2』北茨城市史編さん委員会編 1984
- 青木義一、山川千博「『松岡地理誌』にみる城館遺跡」『常総中世史研究台 2号』2024
- 市村高男「中世港湾都市那珂湊と権力の動向」(『茨城県史研究』87号、2003年3月)
- 中根正人「朝香神社棟札にみる中世の常陸北部—大塚氏を中心に—」『常総中世史研究 7号』常総中世史研究会 2019
- 山川千博「発見した「関田関山城跡」について」『いわき地方史研究 61号』2024年10月

【誌上報告】

史料紹介:東京大学史料編纂所に伝来する2枚の旧山方村城館絵図

常陸大宮市文書館
高橋 拓也

東京大学史料編纂所が所蔵する膨大な史料群の中に、「内務省引継地図」と題された2,000点弱の地図群が存在する。その中に、常陸大宮市域の中世城館跡を描いた絵図2枚が新たに発見されたので、この場を借りて紹介したい。

本稿で紹介する絵図は、①「那賀郡山方村高館古城(内題)」、②「那珂郡山方村亀城(内題)」の2点である。①は山方城跡(常陸大宮市山方)、②は竜ヶ谷城跡(同)の城域と周辺の景観を描いたものであり、いずれも江戸時代の作成と考えられる。両絵図が所収された「内務省引継地図」は、明治5年(1872)から明治新政府が実施した「皇国地誌」編纂事業の過程で内務省が収集した近世～近代の地図史料であり、国絵図や都市図、城図、合戦図など多岐にわたる。明治23年(1890)に地誌編纂事業が帝国大学地誌編纂掛へ移管されたことに伴い、収集された地図は内務省から同大学へ移管され、現在へと至る。①②の絵図は色彩や筆跡が酷似しているが、山や寺院、民家、道の描写など細部の表現に差異が見られることから、作者が異なる原図を同時期に写した可能性も考えられる。

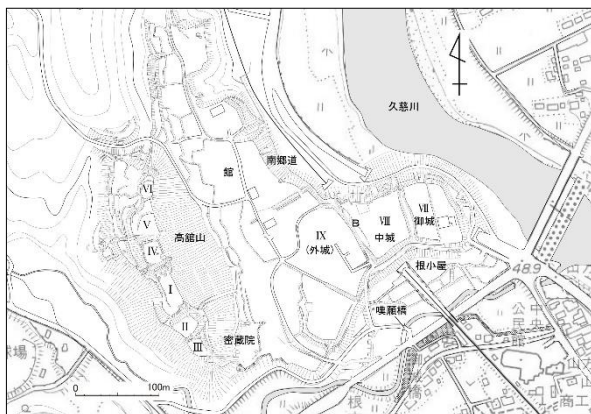
絵図から読み取れる記述や伝承は次の通りである。

①「那賀郡山方村高館古城(内題)」

平城部には「御城」・「中城」・「外城」が明記されており、各曲輪の外側を囲むように堀跡が描かれるほか、山城部には7つの曲輪と「大手門跡」が記される。また、「御城」の東側に腰曲輪と思われる平場が確認できるが、現在は国道118号線のトンネルによって湮滅している。城内には南郷道(右)と舟生村への峠道(左)が記されており、左の道には「上町」「中町」「下町」と、中世の宿場町らしき痕跡が確認できる。久慈川の流路は現在とほぼ変わらないが、城の崖下を沿うように旧河道(古河)が記される。城域と山方宿の間には「東中務地」と記された建物が描かれているが、詳細は不明。

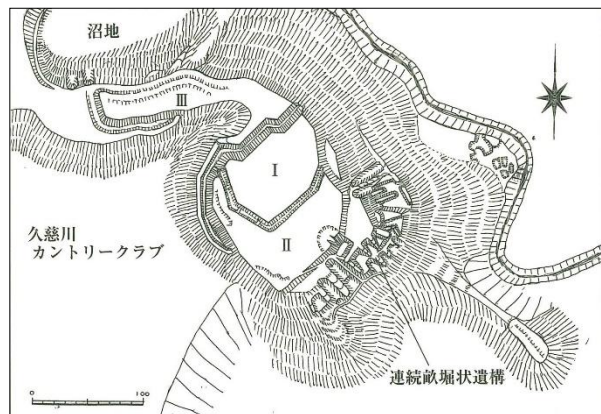
②「那珂郡山方村亀城(内題)」

①とは異なり、城主伝承について、「佐竹氏ノ臣山方能登守篤泰ノ居ナリト云伝テ、又野上村ノ農ニ海老根氏・佐川氏ナルモノアリ、亀城ノ臣ナリト云フ」と記される。城域には平場や堀跡が描かれているほか、城の東側には南郷道と山方宿・常安寺が、久慈川には小貫村へ渡る「舟渡」が確認できる。城の西側に「上寺田村」の地名が記されているが、上寺田村は天保13年(1842)に長田村と改称していることから、天保13年以前に描かれた絵図であることが読み取れる。



山方城跡縄張図(山本浩之氏作成)

※『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』より転載



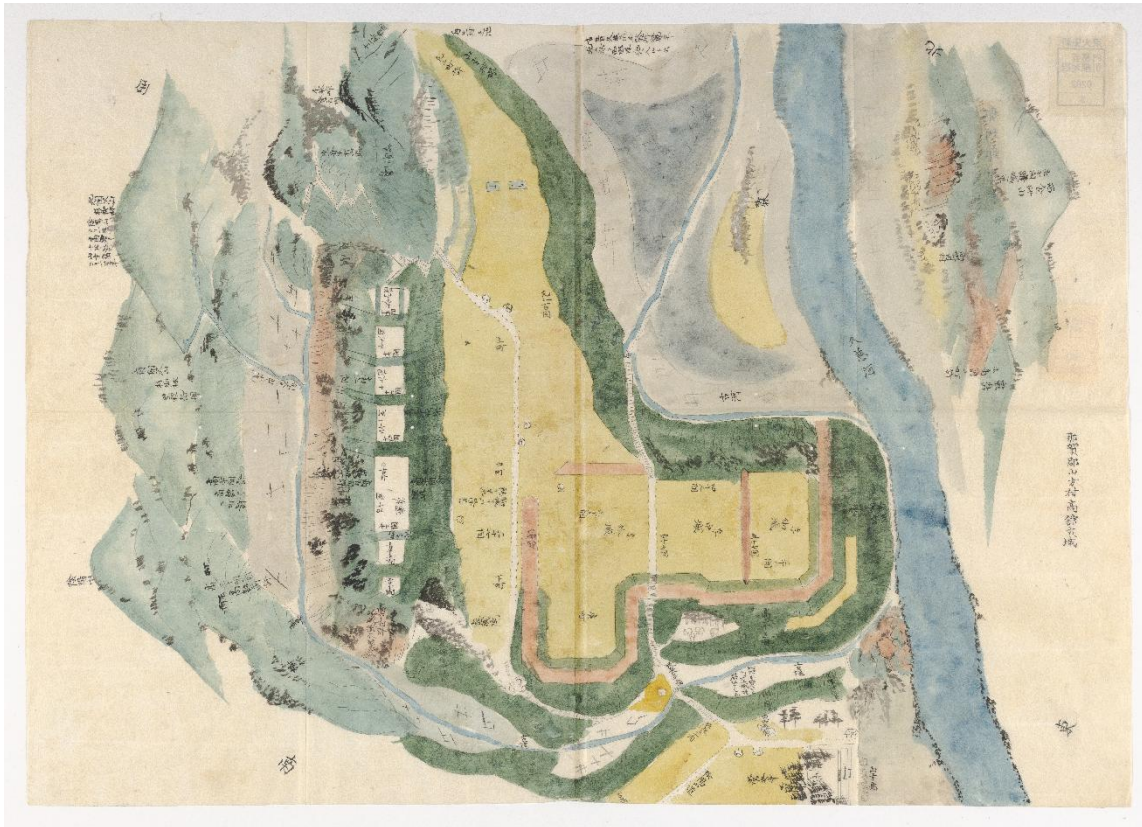
竜ヶ谷城跡縄張図(余湖浩一氏作成)

※『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』より転載

【参考文献】

千葉真由美「皇国地誌編纂過程における地図目録と地図主管の移動—東京大学史料編纂所蔵「内務省引継地図」と関連地図目録の検討から—」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第14号』平成16年)

①「那賀郡山方村高館古城（内題）」（東京大学史料編纂所蔵）



②「那珂郡山方村亀城（内題）」（東京大学史料編纂所蔵）



【誌上報告】

石神城跡の整備に向けて—近年の調査状況と成果概報—

東海村教育委員会生涯学習課
博物館・文化財担当 中泉 雄太

1 遺跡概要と「石神城跡整備基本計画」

石神城跡は、東海村北部(石神内宿)に位置し、標高19mほどの台地の突端部に立地する。往時は城の東端下に久慈川が流れていたと考えられ、川の要害機能や水運機能を利用して築かれた平山城であった。城の構造は、堀で画されたⅠ～Ⅲ郭(内郭)を中心部に配し、その外側に城下町や城主の菩提寺が建てられたⅣ・Ⅴ郭(外郭)が広がる惣構えの城である。

築城時期は諸説あるが、永享4年(1432)足利持氏感状に「常州石上城合戦」とあるため、15世紀前半には築かれていたと推測される。文正2年(1467)佐竹義人預ケ状には、石神小野崎氏が佐竹氏から石神城北側にある「瀧河原」を料所として預けられたとあり、15世紀後半には石神小野崎氏の居城であったと考えられる。その後、天文年間に度々起きた額田小野崎氏との所領争いを経て、最後は慶長7年(1602)の佐竹義宣の秋田移封に従って石神小野崎氏も当地を去ったため廃城となった。現在は県指定史跡に指定され、「石神城址公園」として住民の憩いの場となっている。

東海村では、住民からの要望により、石神城跡の文化財としての価値を維持し、後世に伝える史跡公園を実現するための「石神城跡整備基本計画」を策定した。現在は、将来の整備に必要な情報を得るための測量調査と発掘調査を実施している。今回は近年の調査状況と、その成果の概要を報告したい。なお、石神城跡の文化財保護・調査等の経緯・経過は表1のとおりである。

表1 石神城跡の文化財保護・調査等の経緯・経過

年度	項目
昭和60年度	3月「石神城址公園(仮称)基本設計」策定。※村発足30周年記念事業の一環で公園整備決定。
平成元年度	整備に先立つ発掘調査開始。平成2年度まで。※平成4年3月報告書刊行。
平成17年度～	「石神城跡整備構想(案)」をまとめ、説明板等を順次設置。
平成25年度	10月23日 村指定史跡に指定。
平成29年度	12月25日 県指定史跡に指定。
令和元年度	3月「石神城跡整備基本計画」策定。
令和2年度	外郭内で緊急発掘調査実施。Ⅴ郭関連の堀の一部を確認。※令和6年3月報告書刊行。
令和3年度	2月「東海村石神城跡調査整備委員会」設置。
令和4年度	基本計画に基づく測量調査開始。 令和9年度まで。初年度は内郭の測量調査実施。
令和5年度	外郭の測量調査実施。 基本計画に基づく発掘調査開始。 令和8年度まで。初年度はⅠ郭の発掘調査実施。
令和6年度	外郭の測量調査実施中。令和7年1月からⅠ郭の発掘調査を実施予定。

2 近年の調査状況—令和4年度・令和5年度の成果概報—

石神城跡整備基本計画では、城の全体像を把握し、発掘調査の基礎資料を得るための測量調査を令和4年度から実施している。整備は外郭を含むため、測量調査は旧久慈川河道を含む広範囲に及ぶ。また令和5年度からは、整備に必要な情報を新たに得るための発掘調査を開始した。整備関連の調査は令和9年度まで継続し、最後に各成果を総合した報告書を刊行する(表2)。

現在の調査状況としては、令和4年度に「内郭(Ⅰ～Ⅲ郭)」を、令和5年度に「外郭の一部」を測量調査した。また、令和5年度に内郭の北東端に位置する「Ⅰ郭」を発掘調査し、令和6年度から図面や出土品等の整理作業を開始した。

表2 石神城跡整備基本計画に基づく調査計画

内容	調査範囲	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度
測量調査	内郭	→					
	外郭		→	→	→	→	→
	旧谷・旧久慈川流路					→	→
発掘調査	I 郭・II 郭間通路(橋)・虎口		→	→			
	I 郭柵		→				
	虎口・II 郭柵				→		
	舟着き場 整理作業					→	→
自然調査		→	→	→	→	→	→
文献調査		→	→	→	→	→	→

総合調査報告書刊行

(1) 測量調査の概要(調査主体:(有)三井考測)

【令和4年度】

- 対象地 内郭(I～III郭)。
- 方法 LiDAR SLAM 計測。
- 成果 3次元地形データを測量することで、土塁や堀の詳細な形状を記録し、地上遺構の残存状況を明確に把握できた。

【令和5年度】

- 対象地 外郭の一部。
- 方法 マルチコプターによるLiDAR計測。
- 成果 後世の土地利用により改変され、地上遺構の痕跡が少ない。周知の土塁の他に新たに「土塁状地形」を確認した。地形解析により、外郭の北東端東斜面に急傾斜且つ規則性のあるコ字形の切岸法面があること、北側斜面に複数の「曲輪状平坦地」があることを確認した(図1)。

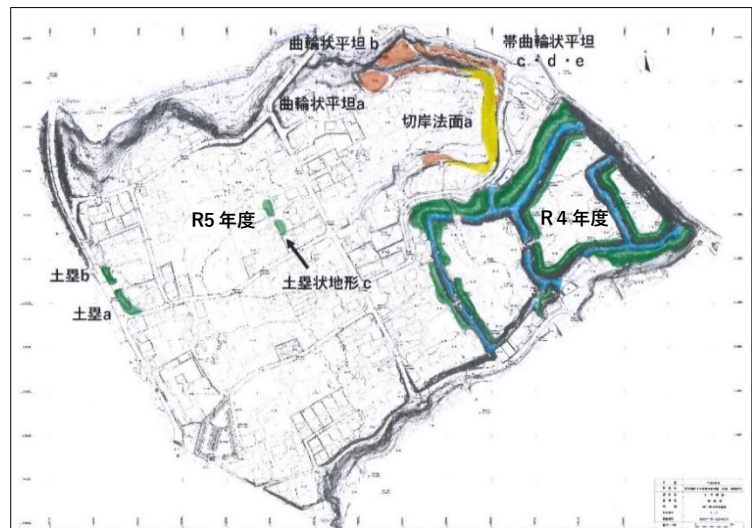


図1 3次元測量図 ((有)三井考測 測量成果簿より転載) ※縮尺任意

(2) 発掘調査の概要(調査主体:東海村教育委員会 調査指導:東海村石神城跡調査整備委員会)

- 対象地 I 郭(調査総面積:約 60 m² 内訳:T1 約 16 m²・T2 約 20 m²・T3 約 24 m²)。 ※T-トレンチの略記号
- 期間 令和5年12月1日～令和6年4月29日
- 成果 調査の目的は、I 郭の北東側縁辺部に調査区を3つ設定し、既往調査で検出した区画溝カの延長及び柵列の有無を確認することで、郭本来の範囲を解明することにある(図2)。

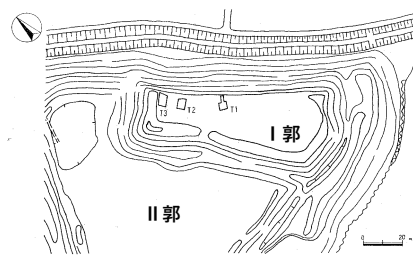


図2 発掘調査区設定図 ※縮尺任意

調査の結果、上記課題の溝・柵列は確認できなかったが、土坑11基(方形竪穴カ含む)、粘土貼土坑1基、溝1条、ピット58基(柱穴カ含む)、不明遺構1基を検出した(図3)。

主な出土品は、土師質土器(皿・香炉・内耳鍋)、陶磁器(皿)、古銭、鉄製品(釘・鍋カ)、銅製品(飾金具カ)、石製品(砥石・硯)である。各調査区では複数の整地面(版築土)を確認し、15～16世紀の間に繰り返し造成があったことが判明した。

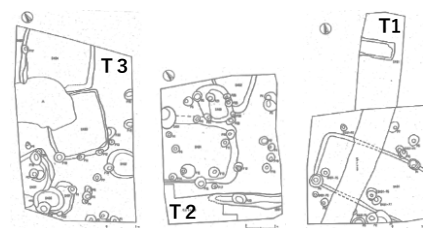


図3 遺構確認状況図 ※縮尺任意

【誌上報告】

額田城跡における調査状況と成果概要

那珂市歴史民俗資料館
学芸員 菊池 晶

1 遺跡概要

額田城跡は那珂市北部(額田)に所在している。城跡の北側に久慈川の段丘崖、南側には有ヶ池(現在は水田)を有した要害の地であった。城域は広大で東西に約 1,070m、南北に約 825mあったと推定でき、県内最大規模の連郭式平山城である。また、南側を有ヶ池、西側を谷津に守られた曲輪Ⅰ、北側の平地に向かって曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲと展開していく。曲輪Ⅰ～Ⅲを城郭の主要部とし、囲むように外郭が広がる構造である。

沿革は、建長年間に佐竹 5 代義重の子義直が額田を領して築城したとされている。山入の乱勃発に伴い、応永 30 年(1423)佐竹義憲の攻撃を受けて佐竹系額田氏は滅亡する。その後、佐竹家臣の小野崎通業の孫通重が入城し、額田小野崎氏が成立した。天文年間には石神小野崎氏と長く所領争いをしていった。戦国時代末期に額田の乱が起こり、豊臣政権の支援を受けた佐竹氏の猛攻によって落城した。現在は一部が市指定史跡に指定されている。

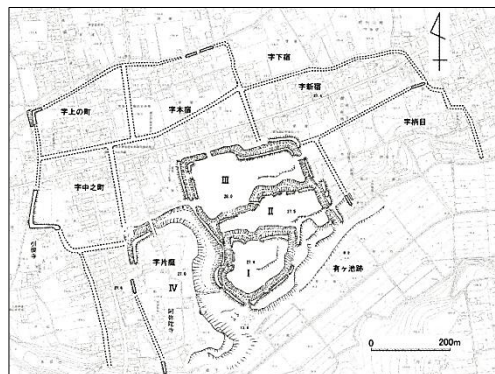


図1 額田城跡縄張り図(『茨城県の中世城館—茨城県中世城館総合調査報告書』より転載)

2 「額田城跡保存管理計画」

那珂市では市の貴重な文化遺産である額田城跡を、広く市民が利活用し、かつ次世代に継承することを目標に、往時の額田城を知るための学術調査を実施して、歴史的な自然公園としての整備をするための「額田城跡保存管理計画」を策定した。平成 29 年度から第 2 期に移行し、今年度は曲輪Ⅱにおいて測量調査を実施している。【表 1】

表1 額田城跡に関する調査や関連事業等の経緯と今後の計画

年度	項目
平成10年度	町(旧那珂町)指定文化財に指定。(6月25日)
平成12年度	那珂町遺跡調査会による、保存整備のための範囲・性格の把握を目的として確認調査を実施。
平成13年度	「額田城跡調査報告書」刊行。
平成15年度	額田城跡保存会設立。※平成20年度から市の委託を受けて管理。
平成22年度	額田城跡の整備に関する陳情の採択。
平成23年度	「額田城跡保存管理計画」策定。
平成24年度～	額田城跡保存管理協定締結。遊歩道、案内板の整備。
平成25年度	額田城に関する歴史資料の発見。(「伊達政宗の起請文」など)
平成26年度	額田城跡内土地の公有化決定。※令和4年3月に曲輪Ⅰ内平場が完了
平成29年度	「額田城跡保存管理計画」第2期が始まる。※令和8年度までの10年間。
令和4年度	額田城跡調査指導委員会の設置。「額田城跡保存整備のための試掘確認調査計画書」策定。
令和5年度	曲輪Ⅰにおける測量調査実施。
令和6年度	曲輪Ⅱにおける測量調査実施中。
令和7年度	曲輪Ⅰにおける試掘確認調査。
令和8年度	報告書の作成及び、「額田城跡保存管理計画」第3期の策定。

※網掛け部分が今後の計画

3 令和 5 年度の測量調査成果概要

令和 7 年度に曲輪 I における遺構の有無の確認及び額田城の性格・概要を把握していくため、建物・施設の規模と位置、築城の変遷などを確認し、今後の額田城跡保存整備方法検討の基礎資料とするための試掘確認調査を実施する計画である。そこで、試掘確認調査の施行場所を確定するため、文化財調査の見地から、額田城跡の微地形測量を行った。

- (1) 対象地 曲輪 I
- (2) 調査主体 有限会社三井考測
- (3) 方法 3次元微地形測量
- (4) 成果

○曲輪 I - A

面積は約 16,400 m²。(土塁部を除く)形状は不定形の五角形。

北東部、北西部、東側縁辺、西側中央部に横矢掛かりがある。また、西側中央部には横矢掛かりとあわせて食い違い土塁がある。北東角は現在土塁が存在していないが、破却された食い違い土塁痕跡と推定される地形が解析された。北東角と西側中央部の堀底からの道は、往時の道の可能性がある。

堀は曲輪を囲むようにめぐっており、深さは浅い箇所約 5.5m、深い箇所約 8.2mと全体的に規模が大きい。

北西角には物見台または櫓台がある。また、西側は防御が増しており、堀に沿うように土塁があり、北に進むほど高さがある。北端には物見台または櫓台と思われる場所が段違いで 2 箇所ある。

○曲輪 I - B

曲輪 I - A の南東方向に位置している曲輪。面積は約 2,900 m²。形状は長方形に近い。西側角には物見台跡と思われる高台を確認している。

曲輪 I - A 側と西側に土塁がある。曲輪 I - A 側の土塁は中央付近で途切れているが、食い違い土塁または土塁同士が接続していた可能性がある。

◎曲輪 I 全体の形状、残存遺構の状況と分類が明確になった。また、従来曲輪と認識していなかった箇所が曲輪(曲輪 I - B)であることを把握できた。

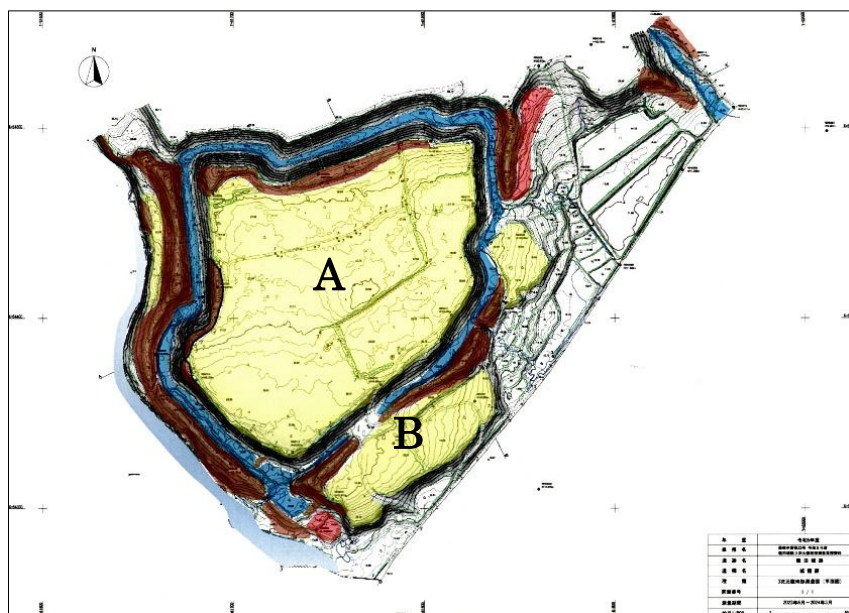


図2 3次元測量図<地形分類図>
(有限会社三井考測 測量成果簿より転載)